

国際文化学部 カリキュラムマップ

2021年4月版

- ◆ 下記のカリキュラムマップは、学部のそれぞれの科目の到達目標と概要を示し、下記の本学部ディプロマ・ポリシー(DP)4項目とどのように関係しているか示したものです。
- ◆ 表の上で、◎:科目と強く関連するもの、○:科目と関連するもの、△:科目とやや関連するものを指します。

国際文化学部のディプロマ・ポリシー(DP)

1	言語(英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、スペイン語、朝鮮語、留学生の場合は日本語)、およびそれらの言語に関する知識の習得を通じて、バランスのとれた国際感覚、異文化に対する共感力、そして幅広い知識を持つ。
2	異文化理解と同時に、自らの文化の枠にとらわれない判断力を持ち、自国の文化を客観的に眺めることができるような、通文化的かつ複眼的な視点を身につけている。
3	異文化間の摩擦が生じた場合でも、健全な批判精神に基づきながら、その要因や過程を見極めて対話を促し、情報の発信ができるような双方向的なコミュニケーション能力を身につけている。
4	ICTを駆使しながら、さまざまな「文化情報」を収集・整理・分析・編集し、新たな「文化情報」を自ら創造し発信する「国際文化情報学」の手法に通じている。

分類	科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4		
入門科目	国際文化情報学入門	『国際文化情報学入門』は各コースの担当教員によるオムニバス講義です。今年度の担当は下記の4名です。 情報文化コース:和泉順子 表象文化コース:竹内晶子 言語文化コース:奥石哲哉 国際社会コース:大中一哉 国際文化学部の学生として身につけてもらいたい基本的な知識を伝え、学生各自が在学中に共通に必要な「文化を学ぶ考え方」を理解するための講義です。私たちの学部では文化を「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」の4つの面から捉えようとしており、それぞれの分野を専門とする4人の教員が担当します。今年度は「インターネット…海外…日本…」というテーマを4つの視座から読み解きます。	「情報文化」は、現代の都市型社会において「情報」こそが我々の思考や生活の基盤であるとの立場から、情報の生成、編集、再構成と文化の伝達や人間と情報のかわりについて学びます。特に、デジタル空間で得られる情報の特性を知ると同時に、それらを素材として自ら思考を考えられるようになるのが目標です。 「表象文化」は、主に人間の知覚と創造行為の関連、創造行為のプロセスとメディアの関連を学びながら、幅広い知の視点の獲得を目指すとともに、研究対象とその方法を選ぶための初歩的な議論を導入します。「表象文化＝芸術に関する知識のインプットではない」こと、創造行為と日常の間にあるもの、表象文化と社会の結びつきについて、思考できるようにするのが目標です。 「言語文化」では、国際文化学部生として知っておきたい言語に関する基本的な知識や様々な外国語学習のコツを、英語を題材にしながら考えていきます。基本的なレファレンス類の使い方、大学での外国語の学び方、日々の情報の収集法等について等が、その内容になります。併せて、他の3分野とのインターフェースについて学んでいきます。 「国際社会」では、現代の世界における国家間・集団間の諸問題を文化的な視野のなかで考える態度と方法を学びます。簡単な単語を使い、外国語が下手でも話そうとする姿勢は大事ですが、皆さんの将来にとっては、話をする時の中身が大切です。この「入門」授業では、高校までの知識を確認しながら、国際問題について考え、語るための糸口を見つけることが目標となります。	◎	◎	◎	◎		
入門科目	チュートリアル	「チュートリアル」は、新入生全員が履修する授業であり、比較的少人数の編成で開講される。この科目では、法政大学国際文化学部における学びに必須の、基礎的なアカデミック・スキルの習得をめざす。「読み書き」に重点をおき、図書館の利用法、文献の検索などデータベースの使い方、レポートの書き方、プレゼンテーションの仕方などについて学んでいく。また、いわゆるアカデミック・スキルの面以外に、国際文化学部でおこなわれている教育研究の内容についても、「チュートリアル」担当教員に積極的に質問などをすることで、少しずつ開きかじっていく。	・受け身で授業に出席しさえすれば良いという態度は卒業し、授業で示された情報をみずから整理する目的で、ノートを作っていくことができる。 ・法政大学図書館のサイトを用いて、書誌など研究に必要な情報を集めることができる。 ・先行研究をリサーチ(尊重)することがなぜ必要なのかを理解したうえで、アカデミックライティングの基本ルールを押さえた文章を作成することができる。 ・口頭で発表をする際にも、自分の考えとは異なる考えをもった聞き手がいることを前提に、論理的に話を組み立てることをつうじてコミュニケーションを図ることができる。 ・法政大学の歴史や、国際文化学部の教育目標が、あなた自身の目指す将来の進路との関連で、どのような意味をもっているか、他の人に話すことができる。			○	◎		
基幹科目	基幹共通	国際文化情報学の展開	本科目は、1年次の「国際文化情報学入門」に続くものとして開設されたものである(ただし必修ではない)。本学部の4つのコース「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」の垣根を超えた共通テーマのもとで、ゲスト講師を含む複数教員によるオムニバス授業を行い、学際的かつ分野横断的な知識を身につける。今年度のテーマは「コロナ禍で再考する国際文化情報学」。今年度の全体コーディネーターは国際文化学部教員の松本悟が担当する。	1. 本学部の四つの柱「情報文化」「表象文化」「言語文化」「国際社会」にまたがった、学際的な複眼を得ることができるようになる。 2. SA、SI、ゼミ活動、卒業論文・卒業制作などが必要となる国際文化情報学のより発展的な知識や考え方を身につける。 3. コロナ禍という直接体験や交流が困難な状況だからこそ、国際文化情報学(intercultural communication)を多角的に考えることによって、国際文化学部の学びの意義を改めて考え直し説明できるようにする。			◎	◎	
基幹科目	情報文化系	デジタル情報学概論	ITを過大評価しても過小評価してもいけない。ムードに流されることなく、正しく理解することが重要である。 デジタル情報化社会、それを支えるデジタル技術全体を広く正しく理解するために、文科系の学生、情報学に関心を持つ人を対象に、広い視野のもとにITの本質を明確にし、わかりやすく述べる。 この科目は本学部で展開する情報科目ならびに情報デザイン・メディア表現科目群の関連専攻科目の根幹であり、受講者が現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得ることを目指す。 情報学と数学の知識などが必要な難解なものであるというイメージがあるかもしれないが、本講義では複雑な数学の知識などがなくても理解できるようにわかりやすく説明する予定であるので、コンピュータや情報学に興味がある方は積極的に受講してほしい。	デジタルとは何かについて理解する。 デジタル情報を用いた様々な要素技術について理解する。 デジタル情報化社会及び、それを支えるデジタル技術全体を広く正しく理解する。 現代の情報化社会に対する明快な理解と広い視野形成を得る。				◎	
基幹科目	情報文化系	統計処理法	みなさんは、新聞、テレビ、インターネットなどを通してデータに日々接しています。これらの、大量で多様なデータの中から、必要なものを情報として抽出し、適切な解釈を与えることは決して容易なことではありません。統計学はデータを数値化し、客観的に分析・評価することで、本質を捉えようとするための方法論です。この科目ではそのような統計学の基本的な考え方を「学んで」いきます。具体的には、統計を学ぶために最低限必要な確率の知識、データを数値化する手法、数値を可視化する方法、数値を最終的に評価・解釈する方法等を習得していきます。	・確率の計算方法を理解する ・データの可視化(グラフ化)の方法を身につける ・基本統計量(平均、分散、相関等)の算出方法を理解する ・データを解釈する方法を身につける			△	△	◎

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	情報文化系	システム論	<p>● 『家族』『人間』『システム？』 コンピュータやSNSばかりがシステムではない、私たちの生活はたくさんの『システム』に囲まれている。電子マネーやオンラインショップがシステムという説明は額縁としても、家族や社会、国際食糧支援、チームスポーツ、コンビニもシステム、と云われたらどうだろうか。</p> <p>暮らしや社会の意外な仕組みが、広い意味でのシステムとして、私たちの文化の中に様々な形で組み込まれている。交通にしても、家族にしても、多岐間関係にしても、うまく機能している間は人々は気がない。その仕組みがシステムとしてうまくはたらかない時に問題として顕在化する。</p> <p>● 「システムという考え方」を学ぶ 本講義を通じて、最初は複雑すぎて捉えられない事例も、「システムという考え方」を用いて整理し、自分で系統立てて捉えることができるようになる。システムとは何か。文化の中の様々な対象をシステムとして捉えることによって、考え方が変わる。</p> <p>本講義では、暮らしの中の身近な例や、システムとして意識したことがない意外な例を取り上げながら、それがどのような意味でシステムなのか、解きほぐしていく。複雑な事例も複数の構成要素が巧みに関係し合った現象として、理解が進む。対象の本質を浮かび上がらせ、改善策の考案へとつなげる。これを練習する。</p> <p>● システムから世の中を見ると、いろいろな事が見えてくる 人が作ったモノだけでなく、『家族』や『社会』も一種のシステムである。たとえば『家族』とは何か、家族が家族でいようとする目的は何か、なぜ現在の形態になっているのか、一度は考えたことがあるかもしれない。あるいは、差別や階層など、他と区別するための概念が新たに生まれたり、消滅すると何がかわるのか、システムとして捉え直す、それが社会の富みに対するQの questionsのQを整理し、明確化することにもつながる。</p> <p>社会にはさまざまな形でシステムが埋め込まれている。その様態は常に変化している。そして、そこにはシステムとしての役割の変化がある。それらを見出す作業は面白い。なぜならその変化は、人間が暮らし方を変革してきた足跡そのものだから。</p>	<p>社会、またはあなたが直面する一見複雑に見える問題に対して、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それほどのような要素からなっているか ・その本質は何か、何を目的としているのか ・複数の要素間の相互関係はどうなっているか ・その問題は、解決可能な幾つかの小さな問題に分けて考えることができるか ・どのようにすれば解決に近づけることができるか <p>を、システムの考え方を指して、問題の構造を理解して、複数の視点から分析し、自分なりの答えを「系統立てて」導くまでの道筋を、自分で組み立てられるようになることを目指す。</p>		◎	○	◎
基幹科目	情報文化系	文化情報学概論(旧:情報倫理学)	<p>【授業の概要】 本科目は、国際文化学部が提唱する「文化情報学」という新しい学問の「入門(Introduction)」にあたる科目です。「文化情報学」とは、様々な文化現象を「文化情報」として捉え直し考察する学問です。そして、それぞれ固有の文化現象のなかに共通する新しい(意味)や(価値)を見出し、文化現象を「文化情報」という角度から解釈し直したり、「文化情報」としての(新しい意味)や(新しい価値)を創出しつつあることを目指します。</p> <p>2021年度の本授業では、「エコロジー(=生態学 ecology)ってなに?」というテーマで、様々な学問にアプローチすることによって、いろいろな角度から「生態学(=エコロジー)」を考えていきます。ただ注意してもらいたいのは、最近流行の「環境に優しい」とか(自然との共生)を指す「エコ」という意味での「エコロジー」ではないということです。</p> <p>この授業の先導役として、天才的な知の巨人グレゴリー・ベイトソン(1904-1980)の思想を検討します。ベイトソンは民族学から精神医学、さらには動物行動学を研究しています。様々な学問を研究しながらも、それらの学問研究の中で、彼が取り組んでいる共通点は、「コミュニケーション」を「環境」との関係性の中で考察することです。ベイトソンは、最初「民俗学者」として東南アジアをフィールドワークの現場に運び、その地域の住民がどのようなコミュニケーションを行なっているかということから研究者の道を始めました。その後、精神病院の患者がどのような「環境」に置かれると精神疾患を発症するかという問題を「コミュニケーション」と家族関係という角度から取り組み、患者の置かれた「家庭環境」から分析する「精神医学研究者」になりました。そして、動物のコミュニケーションを「環境」との関係で捉える一風変わった「動物行動学者」として、クジラやイルカの調査研究に加わっていました。彼の思想遺産を辿ることで、私たちの「文化情報学」のひとつとりのあり方が見えてくると思います。</p> <p>【授業の目的】 そこで本科目では、ベイトソンの『精神の生態学』(1971) (Gregory Bateson, ①Steps to an Ecology of Mind<sup>②</sup>, University of Chicago Press; Univ of Chicago PR版,2000)にちりばめられた様々なテーマを追求しながら、「人と人(自分と他人、親と子ども、など)の(あいだ)のコミュニケーション」だけでなく、人と動物、人と人工物などの(あいだ)にも「コミュニケーション」を見出し、「コミュニケーションと環境との関わり」を考えていくことを目的とします。</p> <p>そして「コミュニケーション」をめぐる「他者承認」の問題や、最近若者間で話題になっている「コミュ障」問題や、実際の精神障害としての「コミュニケーション障害」を検討します。</p> <p>さらにこの授業では、「精神の生態学」の影響を受けた、現代フランスの思想家フェリックス・ガタリ(1930-1992)の思想にも触れたいと思っています。彼は「精神の生態学」だけでなく、「社会の生態学」・「自然の生態学」を含めて、「三つの生態学(=エコロジー)」を提唱しています。さらにガタリの真意は、現代における新しい「生態学」として「情報の生態学」があると上野俊哉氏(和光大学教授)が述べています。この「四つの生態学」までを考察することが目標です。</p> <p>【授業の意義】 本科目の意義は、「文化情報学」の立場から「コミュニケーション」と「環境」との関係というテーマを検討することによって、「異文化コミュニケーション」や「異文化交流・異文化理解」という領域とは異なる仕方での「コミュニケーション」を考察できるようになります。</p>	<p>・本科目の到達目標は、ベイトソンの「精神の生態学(ecology of mind)」という立場を学ぶことで、人間の文化、さらには動物の「文化」すらも含めて考察できる、より広い超越的思考を身につけることを目指します。</p> <p>・「精神の生態学」の領域をさらに拡大し、現代フランスの思想家フェリックス・ガタリのいう「三つのエコロジー(精神のエコロジー、社会のエコロジー、自然のエコロジー)」や「情報のエコロジー」(上野俊哉)も視野に入れて「コミュニケーション」との問題を考察することを旨とします。</p>		◎	◎	◎
基幹科目	情報文化系	情報産業論	<p>情報産業の現状と展望 ～国内外の放送サービスを通して今の情報産業を見つめ、将来を展望する～ 「情報産業」とは、収集、蓄積された情報をもとに、整理、加工、そして思考し、その結果を伝達、流通させ、社会を発展させる産業である。インターネットや関連機器の進展により、情報の伝達、流通を技術的に支えるIT産業が飛躍的に発展し、情報産業が担う領域は益々広がっている。今や技術の進展なしに情報産業の発展はないと言える。しかし、情報を伝える手段が変わっても、情報の本質は不変である。メディアの仕掛けに惑わされなく、本物の情報を見分ける能力の獲得・デジタルリテラシーの醸成が重要である。本授業では、国内外の放送コンテンツの提供サービスを題材としながら、伝送路(放送、通信)をキーワードに、情報産業を俯瞰し、各種メディアサービスの現状を把握し、その将来を展望する。インターネット環境を基盤にした、スマート端末に代表される、よりパーソナルな通信メディアの進展と物との繋がり広がるIoTやAIと共に、従来型のマスメディアである放送、新聞、雑誌の「ありよう」がどうなるのか？ それらのメディアの進展を展望するも本授業のテーマとする。</p>	<p>・グローバル視点でのメディア動向把握とその中の個々の重要性理解 ・アナログからデジタルに移行したTVメディアの変遷の理解 ・インターネットの進展に伴うIT産業の理解 ・放送と通信が連携しているメディアサービスの理解 ・放送メディアが目指しているサービスの理解 ・AIやIoTをはじめとする様々な新情報サービスの理解 ・今の時代に求められるメディアリテラシーについて理解 ・各種マスメディアの今後の展望についての理解 ・国内外のメディア動向の理解 ・国が進める施策の理解</p>		◎	◎	◎
基幹科目	情報文化系	ネット文化論	<p>インターネットがスマートフォン等のデバイスとともに発展し、我々の生活スタイルは大きく変化しています。このような社会を「ネット社会」と呼びます。ネット社会の特性とその本質を理解することは、現代社会の動向に対して主体的に活動するために重要です。</p> <p>本講義では通信ネットワークやコンピュータスマートフォンを基盤とするインターネットの仕組みや歴史、その特性について扱います。また、ネット社会における、価値観、経済活動、合意形成、それを支える情報システムの重要性、知的財産、ソフトウェア、倫理、技術について講義します。こうした内容を通じて、ネット社会を構築する文化についての多面的な思考を深めていきたいと思います。</p> <p>本講義が対象とする領域は、極めて変化が激しいものです。社会的・技術的な課題も日々発生します。こうした課題に対する正解は必ずしも存在するわけではありません。したがって本講義は単なる知識の獲得のみを目的としません。社会で生じている事象の本質を捉え、自らの視点で解釈し、日常生活に対する思慮を深めることを主な目的とします。</p>	<p>日々変化をするネット社会のなかで合理的な行動を行うために、自らにとって重要な情報の選択基準を持続的に構築する考え方の習得を目標とします。また、講義で扱われるネット社会の事例に対し、受講者自身の意見を論理的に説明することや課題を設定し解決案を検討することも目標とします。</p>		○	◎	◎

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	表象文化系	表象文化概論	「表象文化」とは人間が様々なメディアや方法によって創造する行為、またその行為を通じて生み出されたものを示します。各講義では、文学、美術、演劇、音楽、映像芸術、漫画などの領域を扱いますが、特定の分野にとらわれず芸術や文化、社会について横断的に検証していきます。それらの表現手法、歴史的変遷などを辿りながら、内包している意味、欲望、人々に与える影響などを解き明かしてゆくことを目指すのが「表象文化概論」です。 1人の教員による4分野の表象を扱いつつ、表象文化論の基本について学ことを目的とします。	この講義は、入門科目「国際文化情報学入門・表象文化コース」からつながる学びのプロセスとなります。この講義を通じて表象文化に関する多様な考え方を理解し、各専門科目でさらに踏み込んだ研究を継続することが望ましいと考えます。各講義を通じて各自の関心のある領域で今後の専門研究が進められるように導きます。		◎	○	△
基幹科目	表象文化系	メディアと情報	現代社会におけるコミュニケーションを成り立たせるメディアと情報の特性とはたらきをさまざまな分野の考察を通して理解し、生活者として、また社会や市場への幅広い発信に携わる職業人として、メディアに対する姿勢とその活用の基礎を習得する。	以下3点を目標とする。 1)身の回り起こるメディアを介したコミュニケーションのメカニズム、メディアのはたらきを自覚する。 2)環境の監視、事業や制度の運営、文化の共有など、社会においてさまざまな目的のために用いられるメディア・コミュニケーションの必要性と問題性の両面を学習する。 3)メディア・リテラシーの視点を身につけ、メディアと情報のもたらす現象について客観的な評価を行えるようにする。あわせて、あらゆる社会的活動に不可欠となる他者からの理解と支持を得るための情報発信(PR=パブリック・リレーションズ)の視点を育てるようにする。		◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系	社会と美術	国際文化学部基幹科目「社会と美術」は、みなさんが接する機会が少ない新しい表現の世界についての見方や考え方に関するきっかけとなる様な入門的な内容の講義となります。特に、21世紀以降に注目されている社会と芸術との関係を扱ったアートの世界に焦点を当てていきます。また、演劇などのパフォーマンス・アート、音楽、建築などの表象の世界に関する様々な事例を参照し、社会と芸術との接点やその関係性について学びます。 「芸術史と理論」(前半)、「社会と美術」(後半)の2つのテーマを軸として、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。 1. 芸術史と理論 社会と芸術について学ぶ上での基礎となる18世紀から21世紀の近現代の芸術の歴史と理論について学びます。 2. 社会と美術 社会や時代を映す鏡としてのメディアと芸術表現との関係について、具体例を交えながら学びます。	講義では、過去から現在に至る美術史と現代社会と美術に関する身近な事例を紹介していきます。それらの事例より、 1. 美術史の営みを理解すること 2. 身近な問題から普遍的、社会的な課題を見いだすこと がこの講義の目標となります。	○	◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系	メディアと社会	私たちは現在様々なメディアに接する環境にあり、それらを通じて個人や社会とつながることを可能にしています。一方でメディアの利用によって引き起こされる様々な問題もあり、多様化した現代のメディアについてよりいっそう理解を深める必要があります。 国際文化学部基幹科目「メディアと社会」では、メディアが社会のなかでどのような役割を担っているのか、将来メディアはどのようなようになるべきなのか、映像資料などの具体例を交えて読み解いていきます。 「現代メディア史」「メディアと社会」「メディアと表象」の3つのテーマを軸として、各領域のキーワードからそれぞれの課題や問題を検討、議論します。 ・メディアの歴史 古代から現代までのメディアの変遷と歴史について学びます。 ・メディアと社会 社会の中で機能するメディアやその問題点について明らかにしていきます。 ・メディアと表象 メディアという観点から様々な表現を読み解いていきます。	授業では、過去から現在に至るメディアと社会に関する身近な事例を紹介していきます。身近な問題から普遍的、社会的な課題を見いだすことがこの講義の目標となります。	○	◎	◎	◎
基幹科目	表象文化系	身体表象論	視覚芸術・文化に表現された身体を手がかりに、身体を見る/見せるとはどういうことかについて学ぶ。身体と社会の境界が歴史的・文化的に規定されていることを確認し、人間の身体を社会的にどのように位置付ければよいのか、受講生が自分なりの考えを構築できるようにする。	・芸術、文化における身体運動の表象形式を理解することができる。 ・身体表象の特徴を、歴史的、社会的に位置付けることができる。 ・作品に表現された身体に関する自分なりの見方を構築し、作品を批評・分析・記述することができる。		○	○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	
基幹科目	表象文化系	現代思想	<p>【授業の概要】 本授業は「現代思想(contemporary thought)」という科目名がついているが、ただ単に「現代の流行の思想」を学ぶだけが目的ではない。私たちが生きている「同時代(contemporary)」で起こる出来事や物事の、「起源」や「本質」について「哲学的に考えること(philosophical thinking)」が「現代思想」という科目の目的である。 2021年度は、現代の若手経済思想家の斎藤幸平氏(1987-)の『大洪水の前に――マルクスと惑星の物質代謝』(2019)と最新刊の『新書!新書の「資本論」』(2020)を基本的なテキストとして用いて、21世紀の現在における資本主義とエコロジーの問題を考察する。 斎藤氏は、31歳(2020年現在でも、34歳)のときにマルクス研究界最高峰のドイッチャー賞を受賞した新進気鋭の経済思想研究者である。彼は、150年前に出版されたマルクスの『資本論』の中に、エコロジー的な資本主義批判の思想を見出す。そして彼の指摘で注目するのは、最近、各国政府や大企業が推奨し、巷でも流行(?)している「SDGs(持続可能な発展目標)」について半目のコメントをしていることである。彼によれば、「SDGs」を達成しても、気候変動を止められないというのだ。そこで私たちが生きる「現実」は危機的であり、「豊かな生活」がいかに環境を破壊していることを直視する時期に来ている。 本授業では、21世紀の環境破壊が進む現実、どのようにマルクスのエコロジカルな思想を生かせるかを考えることで、私たちの日常生活に当たり前の資本主義的な経済が自然環境に悪影響を与えているか、結果的に、私たちの生き方を厳しくさせているかを考察する。</p> <p>【授業の目的】 本授業では、私たちが生きている現在が、どのような思想状況にあるかという問いを検討することを通じて、現代社会における知と社会状況との関係を思想的に分析することを目的とする。2021年度は、斎藤氏の『資本論』解釈に基づいて、資本主義的な経済発展とエコロジーとの関係を改めて哲学的に問い直すことを目的とする。</p>	<p>(1)「哲学的に考えること(philosophical thinking)」ができるようになる。 (2)私たちが生活することが、いかに自然環境を破壊していくことにつながるかを学ぶことができる。 (3)本当の「哲学の問い」を探り、その問いに答える努力のなかで、生き方をもう一度捉え直し、自分が何をなすべきかを、ひとり一人考える力を身につけていくことができるようになる。 (4)マルクスがいかに優れた「哲学者」であり、時代遅れの思想家でないことを知るることができる。</p>					
基幹科目	言語文化系	言語文化概論	<p>この授業では、20世紀以降さまざまな領域で展開された、言語(ことば)を手がかりとして文化や社会、そこに生きる人間のあり方を捉え直そうとした学問的営み(理論・概念)について学び、現代に生きる私たちが世界をどう見つめ、向き合うかを考えます。</p>	<p>1)テキストや資料の誠実な読みにもとづいて、思想家たちの思想的背景や問題意識を捉え、その理論と基本概念を理解する。 2)言語(ことば)と文化・社会との密接なかわりについて「意味」「身体」「権力」「テクノロジー」などといった観点から検討し、理解を深める。 3)学んだ理論を手がかりに、現代社会とそこに生きる自らのあり方についての問題意識をはぐくみ、自らのことばで表現・伝達する。</p>					
基幹科目	言語文化系	比較文化	<p>オリエンリズム、ジェンダー論、構造主義、文化人類学などの「理論」の基礎を学ぶとともに、それらの理論を映画、オペラ、日本人論、和歌、俳句、連歌、英詩、ハイパーテキスト文学作品、能、モダン舞劇、など実際の作品の比較分析に応用していきます。</p>	<p>比較文化にあたって、単なる相違の指摘に留まらず、より深い社会的・文化的な背景の考察へと思考を深めていくときに役にたつのが、様々な「理論」です。この授業では、文化について考えるにあたって我々を助けてくれるいくつかの理論をとりあげ、具体的な作品分析への応用を通じてその理解を深めます。 授業での学びを通じて、学生は、ジャンル・時代・言語等を異にする文化の作品間の比較文化的な分析ができるようになるとともに、オリエンリズム、ジェンダー論、構造主義、文化人類学などの理論を理解し、作品分析に応用できるようになることを目指します。</p>					
基幹科目	言語文化系	ジェンダー論	<p>多様性に富むグローバルな文化・社会を理解する上で、ジェンダー論は重要な視点の一つです。この授業では、文化的・社会的な性の有り様としてのジェンダーが、歴史的にどのように構築されたか変化してきたかを、言説という概念を軸に考えていきます。そこから、自文化ならびに異文化について、ジェンダーの視点を通じて、より多角的な分析と理解ができるようになることを目指します。</p>	<p>1. ジェンダー研究における基礎的概念を理解できるようになる。 2. 言説分析の基本的な方法論を習得し、ジェンダーに関連する諸問題について、基礎的な言説分析ができるようになる。</p>					
基幹科目	言語文化系	異文化間コミュニケーション	<p>異なった文化を背景にひきずった個人同士が出会い、互いに理解しあえる関係を築く、というのが、外国人との交流なり異文化間コミュニケーションに対してみなさんが抱くイメージなのではないかと思う。 異文化を理解するのは、目で言うほど容易ではない。 異文化者が出会ったとき、それぞれの背景の文化が異なることが原因でどういったことが起こってくるのか、最悪のコミュニケーション・ブレイクに陥らないためには、どうしたらいいのか、自らの体験に基づきながら事例を紹介している直塚玲子の著作をテキストにして、異文化(間)が抱える諸問題に触れていきたい。</p>	<p>異文化間の具体的な問題としてどういったことが起こるかを事例を通じて知ったうえで、自分がそういう場に遭遇した場合に、適切に対処し、問題を最小限に食い止め、可能であれば「相手」との interaction を通じて関係を改善できるという能力を養う。</p>					

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
基幹科目	言語文化系	Philosophy of the Public Sphere	<p>People often think that “philosophy” is quite an old subject — and very difficult, unfortunately. It is true that philosophical questions have been discussed in rather complicated and often confusing manners since many years ago, for example, by Socrates and Aristotle in the ancient Greek period. But many philosophers believe that these questions are tightly related to our everyday life. We are surrounded by many philosophical issues, though we may not always be aware of their philosophical significances; that is, philosophical issues are basically our everyday issues. But how are they related to our life? In this course, you will discuss various philosophical topics, their in-depth meanings, and their philosophical significances, trying to find their very relevance to your life. That may help you see your surroundings, your society and the world in quite exciting and interesting ways. Out of many philosophical topics found in our daily life, we will discuss 13 topics in class.</p>	<p>This course provides a broad introduction to philosophical ways of thinking. The course is open to students from any disciplines, who hope to:</p> <p>(1) understand some of the most fundamental philosophical topics (for instance: freedom, truth, and moral rightness / wrongness),</p> <p>(2) be able to explain the issues in very simple everyday terms, and</p> <p>(3) apply philosophical ways of thinking (reasoning) on every-day issues.</p>	◎	◎	◎	△
基幹科目	国際社会系	国際関係学概論Ⅰ	<p>「国際」を掲げた学部や講義は多様にあり、国境を越えた動きにはGlobal, Transnationalなどの表現もあります。あらためて「国際関係」とは何であり、どのように研究されてきた/するのでしょうか。この問いを念頭に置きながら、「国際関係」が人(及びその集団)のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた/るか、と同時に、その「国際関係」がどう認識、分析されてきた/るかを理解することで、国際関係学の視点と方法を学び、現代世界への理解と取り組みにつなげます。対象時期は近代国際関係の成立から第一次世界大戦までとし、「国際関係学概論Ⅱ」の前提となる内容となります。</p>	<p>①国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつ。 ②現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、それらが生み出された歴史的過程(通時的な視点)、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性(共時的な視点)から理解できるようにする。 ③①、②を踏まえ、国際関係の事象、問題について、自分の意見を述べることができる。</p>		◎	◎	
基幹科目	国際社会系	国際関係学概論Ⅱ	<p>「国際」を掲げた学部や講義は多様にあり、国境を越えた動きにはGlobal, Transnationalなどの表現もあります。あらためて「国際関係」とは何であり、どのように研究されてきた/するのでしょうか。この問いを念頭に置きながら、「国際関係」が人(及びその集団)のいかなる“つながり”によって形成、展開してきた/るか、と同時に、その「国際関係」がどう認識、分析されてきた/るかを理解することで、国際関係学の視点と方法を学び、現代世界への理解と取り組みにつなげます。対象時期は第二次世界大戦から現在までとし、「国際関係学概論Ⅰ」の内容を前提に進めます。</p>	<p>①国際関係の構造と動態、これを分析するうえで用いられる概念や理論について基礎的な知識をもつ。 ②現代国際関係の事象、問題が、複雑に絡み合った要素からできていることを認識し、それらが生み出された歴史的過程(通時的な視点)、同時代に起きているほかの問題や事象との関係性(共時的な視点)から理解できるようにする。 ③①、②を踏まえ、国際関係の事象、問題について、自分の意見を述べることができる。</p>		◎	◎	
基幹科目	国際社会系	国家と民族	<p>日本人とは何だろうか。今日、私たちはそれほど意識することなく、国家や民族の枠組みを受け入れていくかもしれない。とはいえ、これらは近代西洋で発明された後、「普遍的」な枠組みとしてグローバルに浸透しないし強要されたものでもある。本授業では、日本を含むアジア太平洋地域の事例に基づき、主に国家と民族の枠組みが人々の自己意識や社会関係をどのように変化させてきたのかを考察する。</p>	<p>・人種、民族や国民、エスニシティ、ナショナリズムなどの概念内容およびそれが歴史的に構築されてきた過程を習得する。 ・ものを相対的に捉えることによって得られる自己/他者の理解に関する洞察力を身に付ける。 ・アジア太平洋地域における脱植民地化過程を学ぶとともに、現代のナショナリズムの動向を理解する。</p>		◎	○	
基幹科目	国際社会系	平和学	<p>本授業では主に国際機構に着目して平和学を学ぶ。歴史、思想、組織、制度、文化などを通して平和や暴力について考え、国際社会コースの基幹科目として、各自がより深めたい専門領域を見つけるきっかけとなることを目指す。</p>	<p>(1) 消極的平和、積極的平和、文化的平和の概念を使って事例を説明できる。 (2) 国際機構の特徴と平和との関係を具体的に説明できる。 (3) 平和学で取り上げられる方法を理解し実際に適用できる。</p>	○	◎	◎	○
基幹科目	国際社会系	宗教と社会	<p>異文化理解において、宗教は重要な要素の一つです。この授業では、宗教というレンズを通して、過去そして現在における社会の諸問題を検討していきます。宗教と社会の関係を、格差・開発・ジェンダー・ナショナリズム・国民国家・消費・紛争などの問題から捉えることで、グローバル化の進む現代社会における多様な価値観との共生のあり方について考えていきます。</p>	<p>1. 宗教と社会の関係を考えるために必要な、基本的な概念や理論を理解できるようにする。 2. 宗教と社会の関係について、基本的な分析概念や理論を用いて、基礎的な事例分析ができるようになる。</p>		◎	○	
基幹科目	国際社会系	Religion and Society	<p>Students will learn anthropological approaches for interpreting issues regarding religions, societies, and the relationships between them. This course will not be centered on theological discussions, details of religious teachings, or categories of religions. Instead, we will focus on how people practice religion, how they relate themselves to it, and, ultimately, how religions are related to society.</p>	<p>Students will: -Understand basic anthropological approaches to religion. -Improve their interest in and ability to understand 'others' as familiar existences through comparative perspectives. -Acquire the ability to reflect on themselves with the help of 'others', and unfamiliarize the familiarized.</p>	◎	◎	○	
基幹科目	国際社会系	国際文化協力	<p>この授業では国際文化論の観点から国際協力の基礎を学ぶのである。具体的には国際協力の歴史や仕組み、国際協力が文化に及ぼす影響、文化面の国際協力のあり方について知識を習得するとともに、それらを用いて論理的に考える力を養うことを目的とする。基幹科目なので、1、2年生には、専攻科目や演習で更に深めたい学問領域やテーマを見つける機会にして欲しい。</p>	<p>(1) 国際文化論および国際協力についての基礎的な知識を身につける。 (2) 国際協力を文化を結びつけて論理的に事象を分析できる。 (3) 「技術と文化」「開発コミュニケーション」「文化遺産保護」「難民」「パブリックディプロマシー」などに授業で扱うテーマについて説明できる。 (4) 関連する文献の趣旨を的確に読み取れる。</p>	○	◎	◎	○
基幹科目	国際社会系	異文化適応論	<p>国際社会で生きるとき、われわれは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということが国際社会における思考理解のすべてであるとする傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。本講義では、文化心理学における比較文化的実証研究を取り上げながら、心の働きと文化の関連性について学んでいくとともに、世界という視点で捉えたいとき、われわれが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを学んでいく。また、講義で扱う様々なトピックを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを併せて考えていく。</p>	<p>しつけや教育の仕方、あるいは教育システムといったものが、いかにその社会で適応的に生きる人々、つまりその社会にあった行動パターンや感情の働き方を身につけた人々を育てるために作り上げられてきたものであるかを、授業で扱う様々なテーマを通して理解する。</p>		◎	○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	
情報科目		情報システム概論	情報処理システムを構成しているコンピュータのハードウェア及びソフトウェアの基本的な役割や動作を学習する。アセンブラやデータベース機能などの実習もを行い、知識の習得だけでなく、自らが設定した条件でコンピュータが実際に動く部分を自ら確認し、学ぶ。	コンピュータの構成、ハードウェア及びソフトウェアの動作やアセンブラなどを理解し、ITハスポートなどの試験の一部に対応可能な知識や技能の修得を目指す。				△	◎
情報科目		メディア情報基礎	マルチメディア作品をPhotoshopとPremierで作ろう。 PCを使ったコンピュータの活用、文化情報の発信・加工・編集のための基本技法の習得に力点を置いて学ぶ。デジタルとは何かを深く理解することから始めながら、メディア情報の文化史、メディア情報をデジタルに扱うためのしくみと基本技法、デジタルカメラ、スキャナ、ビデオなどメディア機器の活用法、PCを用いた簡単なマルチメディア・コンテンツの制作、HTMLとスタイルシートによるWebコンテンツの構造化とデザイン要素の取り扱いなどを学び、マルチメディアを活用した文化情報の発信・加工・編集のための基礎事項を習得するとともに、コンピュータを用いた作品実習を通じてメディアとしてのコンピュータを駆使するための実践的なスキルを修得する。	PCマルチメディアの基礎知識の習得から始め、画像処理、映像制作の代表的なソフトを備えた実習設備を十分に活用しながら作品制作を行う。これにより、インターネット環境において文化情報を発信できる能力を身につけることができる。					◎
情報科目		ネットワーク基礎	世界中どこでもInternetで安全確実にコミュニケーションできるようにしよう コンピュータとネットワークをコミュニケーションの基盤ととらえ、ネットワークとコンピュータを用いた共同作業やインターネットにおける情報交換・情報共有の仕組みを、WWW、メール、ビデオ会議、グループウェアなど先端的コミュニケーションツールの基本概念とその実用例を通して学ぶ。世界中どこに行っても安全確実にコミュニケーションできる知識とスキルを修得する。	インターネットの通信とサービスの仕組みの基礎知識を習得しビデオ会議やソーシャルメディアなどインターネット環境での情報サービスの活用法を学び、同時に正しい使いこなしのためのセキュリティ知識を身につける。海外でのインターネットの利用とePortfolio活用のスキルを身につけ、学外での学習記録や在外帰国報告のための活用法と有効性を理解する。本科目の履修と関連科目での既習知識を総合することと、ITハスポート等にもつての知識習得を目指し、さらに関連の上位科目に結びつける。				△	◎
情報科目		メディア表現法	Photoshopの応用テクニックをいろいろ学ぼう PCを使ってのマルチメディア制作とデザインの基礎を講義と実習を交えて学習する。とくにコンピュータ上でメディアデータの特性とコンピュータによる画像処理、図形処理について表現・変換などの知識を身につける。Photoshopを基本ツールとして画像レタッチの諸技法を学ぶ。自ら写真を撮影し、いくつもの課題制作に取り組む。見やすい作品づくりを目指して、配置、コントラスト、整列などデザインの基礎知識を習得し、実習作品の表現に応用する。これらを通じて情報メディアの活用とメディアデータの処理技法を学習し、Webやパッケージメディアの視覚面をどのように活かすことができるかを学ぶ。セマスタ中の課題をクラス全体で合評することでお互いの作品の良いところを学び、質の高い制作を目指す。	Photoshopの応用技法を習得し、デザイン、配色の基礎を修得し、PC上の画像処理とデジタルプリンタ等の周辺機器との関係を理解することで、デジタルマルチメディアの特性を活かした中級以上の作品制作ができるようになる。					◎
情報科目		メディアアートの世界	メディアアートの作品世界を知り、自作のプログラムでメディアアートの作品制作を体験しよう 本講義では芸術表現のためのプログラミング言語Processingのプログラム(スケッチ)基礎を学ぶ。またメディアアート作品の芸術論集を手がかりに、様々な作品例とそれらの構成手法を並行して学ぶことにより、メディアアートのためのビジュアルな表現手法を習得する。また現代的な潮流となりつつあるp5.js環境でのProcessingプログラムのWeb環境での実装についても学ぶ。	メディアアート作品の鑑賞のための技術的な枠組みと批評言語を理解できる。Processingの制作環境での描画や対話機能を身につけ、メディアアートのための表現手法の基礎を習得する。IoTやMakerムーブメントなどWebと現実世界が交差する今日的な環境、身の回りにおける生活の道具がネットにつながるこれからの生活環境について理解し視野を広げる。			○	○	◎
情報科目		プログラミング言語基礎	情報システムを構築する上で必要なプログラミングには様々な言語が用いられている。本講義ではオンライン併用環境であることを考慮し、使用言語をJavaScriptとする。ただし、基本的なプログラミング言語とも云えるC言語についても、データ型、配列、関数、ポインタ、ファイル操作などのプログラミングに関する基本事項を学ぶために適宜補足として取り入れる。JavaScriptやC言語を実際に使いながら基礎的な概念を学び、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。	プログラミングの基本構成として記述/実行方法や基本的な文法を理解し、簡単なプログラムを作成する能力を修得する。具体的には、プログラミングで用いる用語や概念を理解し、独力でプログラミングに関する本を読んで理解できるようにすること。かつ簡単なアルゴリズムを学習することで簡単なプログラムを実装できることを目指す。					◎
情報科目		仮想世界研究	社会の重要なテーマとして「仮想世界」を取り上げる。受動的に講義を受けるのではなく、「仮想世界」の問題に対して、受講生が主体となって具体的な視点を用いて検討できるよう、工夫されている科目である。 ● 手ごたえのない「現実」vs.リアルな「仮想世界」 ヒトはかつて仮想世界を作り出した。気がつく、現実と仮想との境界はますます曖昧になってきたと感ぜられる。 その一方で、私たちの生活のさまざまな場面で、「手ごたえ」=リアリティ(現実感)が薄れつつある、とも指摘される。私たちの日常生活は、仮想世界が浸透することによって何が「変化」し、どのように「拡張」されたのか。そして、それは問題なのか。 ● つながっているアブリは寂しい? でも親密なのはもったいない 「情報」を軸とする変革の波は、私たちの考え方や生活に対して、静かに、深く影響を与え続けている。しかし、私たちはこの変化の意味を十分に把握しているとは言えない。仮想世界がもたらす意味を問う。 仮想世界の問題は、SFや物語ではない、私たちの生活に現実起きてくる現象である。本講義を通じて受講生は、『ヒトは原則から巧みに仮想(バーチャル)な世界を作り出し、つぎつぎに自分の限界を超えてきた動物である』ことに気づく。この現象の論点を見究め、洞察することを目指している。そして、新たな仮想世界を造り始めることだろう。	そもそも「仮想世界」は、なぜ生み出され、人間にとってどのような意味を持つのだろうか? 本科目の履修を終えると、次の事例について基本用語を用いて言及できるようになる a. 仮想世界における「私」、それは「本当の私」なのか? b. 手ごたえのない現実世界と、妙にリアルな仮想世界、というパラドックス c. 「仮想現実感」(VR)の構成要素と基本的な考え方 d. VRの、社会のさまざまな側面への浸透 e. 仮想世界はなぜ生み出し、どのような意味を持つのか			○	○	◎
情報科目		社会とデータサイエンス	情報化社会が発展・普及していく中で、様々なものがデジタル化されインターネットに接続されつつある。この授業ではIoT(Internet of Things)やビッグデータ等に関連するデータサイエンスというキーワードから、パソコンで作成するデータだけでなくセンサーや人の行動、公的機関からの公開情報等から得られるデータがどこでどのように利用されているのかを学ぶ。また、データサイエンスとはどのような人材なのかを議論しながら、様々なデータの性質や扱い方、可視化等を統計学等の観点から学び、実践する。	ビッグデータ、IoT、オープンデータ、といった言葉で表現される膨大なデータの活用としてデータサイエンスのいくつかの事例と、そこから作られる情報や価値について学ぶ。個々のデータの具体的な内容ではなく、異なる内容や形式を持ったデータに共通する性質や、データを正しく扱うために情報科学だけでなく心理学や社会学など社会科学分野にも重要な統計学などを学ぶ。また、同じデータでも可視化の方法によって伝わり方が違う事を学び、実践する。				△	△

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP1	DP2	DP3	DP4
言語科目		世界の言語 I	世界の数多くの言語のうち、この授業では、インド・ヨーロッパ語族(印欧語族)の言語について考察していきます。この語族の言語は世界中に広がっていて、今では全ての大陸で話されています。この語族がどのようにしてできたのか、どのようにこの語族の言語が変化してきたのか、特徴はどのようなものか、世界の言語の中でどのような位置にあるのかについて知ることが、本科目のテーマです。	具体的には、以下の5つです。 1) インド・ヨーロッパ語族の言語について、その全体像を把握すること。 2) インド・ヨーロッパ語族について、その歴史を知ること。 3) インド・ヨーロッパ語族の言語の研究の方法や背景について知ること。 4) 他の語族とインド・ヨーロッパ語族の関係について知ること。 5) 一般的に、言語の歴史・構造について、知識を得ること。	◎	◎		
言語科目		世界の言語 II	この授業は「世界の言語 I」と交替で隔年開講されています。「世界の言語 I」がヨーロッパ語族に関する内容であるのに対して、この授業ではアジアの言語、特に東アジア漢字文化圏各国(日本、南北朝鮮、中国、台湾、ベトナム)の言語を中心に取上げたいと思います。しかしそれに限らず、言語をとりまくさまざまな現象に関して言及しながら、みなさんの学習言語が何語であれ、その学習に少しでも役立つような語をしたいと思います。人工言語として知られるエスペラントについても取り上げる予定です。	言語について公平な視点をもてるようになること(一例をあげれば「日本語は非論理的、英語は論理的」のような俗説に惑わされないようになること)、そして学習言語と日本語をさまざまな側面から対照できる力をつけること、以上のことを目標にして履修してください。	◎	◎	○	
言語科目		世界の英語	グローバル社会の現在、「英語」ほど広範に使用されている言語はありません。しかし、その「英語」とは一体どのようなものなのでしょうか。World EnglishesやEnglish as a lingua francaという言葉を聞いたことがありますか。英語の国際的普及は、地域の社会的要因に関連して多様化した様々な英語変種を生み出しました。英・米・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの各英語だけでなく、インド、シンガポール、タイ、マレーシア等のアジア諸国でも多様な「英語変種」が存在し、これらはWorld Englishes(世界の英語たち)と複数形で呼ばれています。また、グローバル化の進展はビジネスや教育上の国際交流・協力の急速な拡大をもたらした。そのような現場で英語は言語文化の異なる者同士のコミュニケーションにおいて「共通語(a lingua franca)」として幅広く使用されています。本講義では、これらWorld EnglishesとEnglish as a lingua francaという2つの視点から、一見自明とも思われる世界における「英語」の実態について追っていきます。学期前半では、社会及び言語使用へのグローバル化の影響と英語の国際的普及の過程を概観した後、特に英米などの英語を母語とする国々とアジア諸国において多様化した英語変種の言語的特徴について、その歴史及び文化的背景にも触れながら学んでいきます。その後、学期後半では、植民地化の遺産や標準語イデオロギー、英語母語話者信仰等の概念や現象についての学習を通して、英語を取り巻く問題について理解を深め、更にはヨーロッパやアジア諸国での実際の事例研究を取り入れながら、ビジネスや高等教育等の国際的な場において言語文化を創する者同士が、英語を共通語として使用してどのようにコミュニケーションを図っているのかについて、特にコミュニケーション・ストラテジーの使用を中心にその特徴を学んでいきます。最終的には、学習内容に基づき、グローバル社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について批判的に考察できるようにすることを目指します。	1. 国際的普及によって多様化した英語変種の地域的特徴(音声の仕組み、および文法等)とその歴史的背景について理解し、まとめることができる。 2. 国際共通語としての英語でのコミュニケーションの実態や特徴についてまとめることができる。 3. 標準語イデオロギーや英語母語話者信仰などの「英語」を取り巻く問題とその重要性について説明することができる。 4. 上記1-3を踏まえた上で、グローバル社会における英語の役割と求められる英語コミュニケーション能力について批判的に考察することができる。	◎	◎	◎	△
言語科目		言語の理論 I	知識ゼロの人向けの言語科学の案内です。知識を得るといふより、取り上げるそれぞれの分野の「力」を実感していただくことになるので、それぞれの分野が自分に向いているか向いていないかの判断の材料としてお使いください。	- 「言語」についての世間にあふれた誤解を解く。 - それぞれの分野への自分の向き・不向きを判断の材料を得る(あくまで「材料」に過ぎません)。		◎		
言語科目		言語の理論 II	この授業の内容は、「経験科学」としての言語学入門になります。いわゆる人文系の学生は、「科学」と聞くといふに苦い顔をするものですが、それはおそらく「科学」に対する誤った認識によるものです。そのような誤解を解きつつ、統語論・形態論・意味論・音声学・音韻論といった言語学で基本となる諸分野を紹介し、各分野にどのような言語の謎があるのかを見ていきます。その紹介を通じて、受講者に言語研究における各分野ごとの雰囲気や基礎知識に触れてもらうこと、そしてそこから自分の肌に合う分野を探ってもらうことが授業の目的となります。	1. 言語学の各分野における基礎知識を理解できる 2. 言語的な事実の気付きに敏感になる、また気付いた事実に対し初歩的な考察・分析ができる 3. 科学研究の方法論に対し、正しい認識をもつ		◎		
言語科目		社会言語学	言語を研究する観点として、「言語そのもの」の構造を明らかにしようとするものと、「現実の社会とのかかわり」の中で、言語がどのように使われているかに注目するものがある。後者が、当講義で扱う「社会言語学」と呼ばれる分野である。社会言語学が取り扱うテーマは多岐にわたるが(ことばの使われ方の多様性/言語の変化/ことばの乱れ/意識/ことばの地域差/コミュニケーション/アイデンティティ/言語/方言/ことばの接触/言語政策/…)、講義ではこれらを全般的に射撃し入れつつ、日本語社会を対象とした「近年の言語変化」「近年のことばの地域差」について重点的に取り上げる。毎回の課題準備と学生どうしの意見交換を通して、「いま・現在」のことばの使われ方を、各自が知恵を絞って考えてゆく。(履修者の状況に応じて、内容を適宜変更する場合がある)	社会言語学的な「もの見方・考え方」ができるようになる。履修前と履修後でことばをめぐる風景が異なって見えるようになり、最終的には自分で選んだテーマによるしっかりしたレポートを仕上げる。		◎		△
言語科目		応用言語学	本授業では、応用言語学のうち言語習得にかかわる基本的問題についてとりあげる。まず、言語研究を通して解明される心の問題にはどのようなものがあるのかを理解し、その問題を解き明かすために使用される言語の分析方法や心理学的実験手法に関する基礎的知識を身につける。	(1) 言語研究を通して解明される心の問題にはどのようなものがあるのかを理解する (2) 先行研究ではどのような言語の分析方法や心理学的実験手法が用いられてきたかを理解する (3) 当研究分野でどのような研究が行われてきたのかを俯瞰し、研究における問いの立て方・解決の仕方を習得する		○		
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語コミュニケーション I (会話)	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students realize studying abroad is not just a dream for them, but will soon be a reality. Since all students are scheduled to study abroad within one year after the course begins, students should start actively preparing themselves for their study abroad experience.	The goal of the course is to: 1) develop students' English language skills and abilities to interact more naturally in English, and 2) give students the sociolinguistic confidence and communication skills necessary for a successful study trip abroad.	◎		○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語コミュニケーションⅡ(表現)	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. This course will focus on further developing students' abilities to perform successfully in an all English-speaking academic and social environment. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their current skills and future needs.	Building on the English language skills acquired in the first year required courses, the English 1-6 series, and English Communication I, the goal of this course is to help students become responsible international students capable of unsupervised independent language learning while studying abroad.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語コミュニケーションⅢ(留学会話)	Native English-speaking instructors teach this course using communicative English language pedagogy and classroom practices common in English as a Second Language (ESL) programs at universities in English-speaking countries. So students are expected to advance all their language skills: listening, speaking, reading and writing. The course will focus on helping students become more independent language learners and prepare for their study abroad in the autumn semester. Since all students are scheduled to study abroad within six months after the course begins, students should become more reflective about their current weaknesses and what skill areas they need to improve.	Building on what was studied in previous English Communication classes, the goal of the course is to further develop students' English language skills and academic abilities to interact successfully in an all English-speaking university environment. Students will continue to work on expanding on their general knowledge of intercultural communication and the sociolinguistic communication skills necessary for a fruitful academic experience while living abroad.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅠ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine certain cultural phenomena that impact our lives. Emphasis throughout this course will be on the notion of "possibility" — the exercise of looking beyond mere appearance. The notion of "possibility" will be used to explore three major themes — art, rebellion, and market advertising. Each theme will be explored through short authentic readings, visual material, and music CDs, all of which will be used to set the groundwork for group discussions and an exchange of viewpoints.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course is designed to improve students' critical thinking ability by challenging their belief systems while examining three cultural phenomena - art, rebellion and advertising.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅡ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course is an introduction to the concepts and theories of Microeconomics for non-business majors meant to broaden and enhance students' worldviews and give them the English language tools necessary to deal with readings and conversations commonly found in the business world when English is used.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course aims to help students accomplish the following: 1) develop their knowledge of key vocabulary and concepts of economic theory with particular emphasis on microeconomics, 2) understand and be able to explain microeconomic models both verbally and graphically, and 3) analyze how changes in economic factors can affect individuals and entities within the economy.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅢ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as make presentations on related cultural topics.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to talk about their experiences abroad and make contrasts and comparisons with life in Japan.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅣ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will discuss and examine various cultural issues as well as present on related cultural topics.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. Students will be able to examine cultural issues and gain a better understanding of how others see Japan. This course explores English related to contemporary social and cultural topics, and offers a forum for students to make contrasts and comparisons with life in Japan.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅤ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Through pair work and group activities, students will converse on such topics as world knowledge, personality traits, animal testing and gun control.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The aim of this application course is to acquaint students with certain social/global topics and for the students to communicate their thoughts on the topics with their peers.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅥ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Though Canada is the second largest country geographically in the world, it has a comparatively small population. This disparity makes Canada's size both an asset and its challenge. In the Canadian Life course, we will look at those features that make Canada unique. Study topics will include First Nation/Aboriginal Peoples, Canadian Arts, Multiculturalism and English/French Culture.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Canadian Life course explores Canadian culture and lifestyle and Canada's development as a nation. Each class period will be divided into four parts: (a) a short lecture introducing the week's topic, (b) Canadian fact sheet questions and answers, (c) a guided topical conversation, and (d) short readings and presentations. This course is designed for students to be actively involved in all in-class activities.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅦ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will examine how the great changes happening from around 1400 to 1600 affected Renaissance art, and we will also observe how Renaissance art was a reflection of social and cultural change.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The Renaissance was a historical period that brought profound changes in literature, science, government, and social customs. It is, however, perhaps best remembered for its artistic developments. Starting in Italy in the early 1400s and continuing into the Netherlandish Renaissance of Northern Europe, we will look at specific artists that embody these periods, their broader artistic context, and discuss the social and cultural changes taking place that influenced their work.	◎		○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅧ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this course is the mastery of the English necessary to adequately present and discuss cultural topics of interest to the students. During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅨ	English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. All third and fourth-year students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country through their Study Abroad experience, which is an Intercultural Communication Activity sometimes described as Cultural or Educational Tourism.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	英語アプリケーションⅩ	English Application is an integrated 4-language skill communication course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. We will first view successful presenters. Next we will discuss how and what makes their presentations effective. Finally, students will practice and present in class using an internationally acceptable style.	The goal of English Application is to give Post-SA students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The objective of this particular course is to: 1) teach students the difference between domestic Japanese business presentation practices, and international business presentation style, and 2) prepare students to function effectively in an international business environment.	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語コミュニケーションⅠ	当講座はドイツ語の基礎的なコミュニケーション能力の育成を目指す。コミュニケーション能力とは音声面の正確さ、文法面の正確さ、場面に応じた適切さ、をもって運用される言語能力を意味する。それらの三つの要素の習得を目指す。	当講座では、学生一人ひとりがドイツ語で基礎的なコミュニケーションができるようになることを目指す。Basicな言語運用能力の一層の定着を目指す。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語コミュニケーションⅡ	受講者が困難なくドイツ語圏で生活をするためと大学生活を送るために、積極的にドイツ語を使う必要があります。授業を通じて「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能を総合的に体得することが目標です。	受講者は困難なくドイツ語圏で学生生活を送れるようになること 少しでも多く話せるようになること 一つでも多くの単語と表現を覚えることがこの授業の目標です。 聴解力・読解力・表現力における弱点を補強し、基礎を確実なもの、使えるものとする ことを目標としています。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語コミュニケーションⅢ	当講座はドイツ語のコミュニケーション能力の育成を目指す。コミュニケーション能力とは音声面の正確さ、文法面の正確さ、場面に応じた適切さ、をもって運用される言語能力を意味する。それら三つの要素の習得を目指す。	想定された日常生活の具体的な場面の中で、学生一人ひとりが実際にドイツ語を使ってみることによって、ドイツ語のコミュニケーション能力の習得を目指す。	◎	○	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語アプリケーション①	SAドイツ語圏の留学準備とともに、SAによって獲得したドイツ語運用能力を維持し、さらに向上させるためのトレーニングを行います。ドイツ語の読む、書く、聴く、話す楽しみを存分に味わいましょう。	・ドイツ語圏の生活、文化、社会など多様なテーマに関する理解を深め、ドイツ語で表現・説明することができる。 ・抽象的なテーマについて、ドイツ語で自分の意見を述べ、議論に加わることができる。 ・まとまった分量の作文をドイツ語で書くことができる。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語アプリケーション②	ドイツ留学などを通して身に付けたドイツ語の運用能力をさらに高めるためのトレーニングを行います。授業の前半では、辞書なしで文意を捉えられるよう速読の力を養い、後半ではドイツ語の構文を正しく理解し精緻に読み解けるよう、精読の訓練をしていきます。また必要に応じて会話や聞き取りの練習もを行います。	ドイツ語圏の生活、文化、社会、歴史など多様なテーマに関する理解を深める。抽象的なテーマを扱ったドイツ語の文章を正確に読み解く。辞書なしで文章の大意を把握できるようにする。ドイツ語のしくみや、ドイツ語圏の人々の考え方を学ぶ。様々な文化との対比を通して、間文化性を理解する。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ドイツ語アプリケーション③	Alltagskultur im deutschen Sprachraum ドイツ語圏の日常文化:日本と比較してみましょう。 この授業では身近なテーマから時事問題までドイツ語圏のいろいろなトピックにスポットを当てたいと思います。受講者はそれを理解し、自分または日本の実情と比較し、各テーマについて意見交換をします。簡単なディスカッションも試みたいですが、批判的に問題を扱う姿勢、自己の生活文化を見つめ直す姿勢を育てます。Goethe-Institut等のドイツ語検定試験の準備として役に立つと思います。	1) 中級以上のテキストを理解できる。 2) 様々な領域の語彙を習得する。 3) 基本的な文法事項を復習する。 4) 幅広いテーマについて、明確に意見を述べ、時事的な問題への見解を表明し、長所、短所を挙げることができる。 5) 簡単なコメントやショートエッセイが書ける。 6) 簡単なプレゼンテーションを作成できる。	◎	○	◎	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語コミュニケーションⅠ(会話)	フランス語コミュニケーションの力を発展させるクラス。フランス語会話を日常生活の中で使えるように土台をつくる。聞く、読む、話す、書くの四つの能力をまんべんなく鍛え、確実に学習事項を身につけられるように構成されているプログラムです。表現と、関連する文法の機能を体系的に理解する練習を行い、学習のこころ早い段階からフランス語のコミュニケーションを可能にし、学習のモチベーションを与えたいと思います。	フランスの中で旅行および生活するために不可欠な基礎の知識を習得する。	○	△	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語コミュニケーションⅡ(表現)	スタディ・アブロード・プログラムで予定されているアンジェ滞在にむけて、必要な語彙や表現を、音声や文字のかたちで使えるように授業です。教科書 Le Nouveau taxi 1を中心に進めますが、インターネット上にあるフランス語圏の動画や記事も利用します。	教科書 Le Nouveau taxi 1を終え、学んだ表現を自分でも聞き取ることができ、会話で使えるようになる。また日常的な内容の文章を読み、電子メールや簡単な手紙が書けるようになる。	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語コミュニケーションⅢ(留学会話)	フランス・アンジェへ行く前の直前準備講座。日常生活の中で、フランス語でのコミュニケーションがもっと細かくできるようにレベルアップさせる練習を行う。さらに基礎文法を固め、必須な語彙を増やし、フランス語のスキルを高める。練習問題は多くの場合はペアで行うように学習者同士のコミュニケーションが促される仕組みになっているプログラムです。	前年度よりさらに会話のテーマを広げながら、フランスで暮らせるために様々な角度からコミュニケーションの力を強化させる。	○	△	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語アプリケーション①	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2 ou B1). Les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit seront travaillées afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur les cultures française et francophones.	Ce cours permet à des étudiants déjà confirmés (2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : amplification du vocabulaire, meilleures capacités de lecture et d'expression orale ou écrite. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe à B1 voire B2) comme des "kentei-shiken".	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語アプリケーション②	Ce cours, suite du premier semestre, s'adresse à des étudiants d'un niveau de français déjà confirmé (A2 ou B1). Les compétences de compréhension et de production à l'oral et à l'écrit seront travaillées afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur les cultures française et francophones.	Ce cours permet à des étudiants assez confirmés (au moins 2 ans de pratique du français) de poursuivre leur apprentissage : amplification du vocabulaire, meilleures capacités de lecture et d'expression orale ou écrite. Il permet la préparation des examens du DELF (préparation directe à B1 voire B2) comme des "kentei-shiken".	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語アプリケーション③	Ce cours s'adresse à des étudiants d'un niveau de français intermédiaire. Les compétences de compréhension et de production à l'oral seront travaillées en priorité afin d'améliorer le niveau de communication et d'expression. Des exercices de grammaire et de vocabulaire seront également proposés pour renforcer le niveau général en français. Les thèmes étudiés permettront aussi d'élargir les connaissances sur la culture française.	Ce cours s'adresse à des étudiants de niveau intermédiaire, motivés pour la poursuite de leur apprentissage : augmentation du vocabulaire, meilleure capacité d'expression orale (et même écrite), mise en place d'un véritable savoir-faire communicatif. Il peut préparer aux examens du DELF "B1" comme des "kentei-shiken".	○	△	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	フランス語アプリケーション④	Ce cours, d'un seul semestre, est destiné à des étudiants qui se préparent à la vie active et qui veulent communiquer en français, à l'oral comme à l'écrit, dans des situations professionnelles (ビジネス・フランス語). Il constitue une bonne initiation au vocabulaire de l'économie et du monde du travail.	Ce cours prépare à la vie professionnelle en France ou dans un milieu professionnel francophone. Il est également utile à la préparation des examens du DELF ou des "Kentei-shiken". Ce cours est d'un niveau A2-B1.	◎	△	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ロシア語コミュニケーションⅠ	日常的に使われる会話表現の習得を目標とする授業です。ロシア語の発音とイントネーションに慣れることから始め、挨拶、受け答えの基礎から徐々に語彙を増やしていき、最小限の日常行動が可能となるような会話の基礎を作ります。また、講師との対話(会話)を通して、現地事情を感じてもらえるような授業を目指します。	簡単なロシア語の質問を正しく理解し、答えることができる。簡単な言葉で自分のことを表現できる。文章を正確に読むことができる。	○	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ロシア語コミュニケーションⅡ	現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。	ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること。ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること。自分の考えをロシア語で表現できること。	◎	○	◎	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ロシア語コミュニケーションⅢ	現地学習に備え、必要な会話力習得を目的とする授業です。1年次に学習したことを基に、また、会話表現に必要な事項を補いつつコミュニケーション力をつける練習を繰り返し行います。	ロシアで学習、生活する上で必要な語彙を習得すること、ロシア語での質問を正確に理解し、それに適切に答えられること、自分の考えをロシア語で表現できること。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ロシア語アプリケーション①	これまでで培ってきたロシア語の文法と読解の力を向上させ、ロシア語で多様な情報や知識を得る楽しさを分かち合います。文法問題と読解を積み重ねていくことで、学生のみならず検定試験(ロシア語能力検定試験とT P K H)のさらなるレベルを目指せるようにします。	ロシア語能力検定試験、あるいはロシア連邦教育科学省が認定するロシア語検定試験(T P K H)の学生各自が目標とするレベルの合格を目指します。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	ロシア語アプリケーション②	秋学期は春学期同様、ロシア語の読解力(情報を正確に読みとる力)を養います。並行してロシア語能力検定試験、およびロシア語検定試験(T P K H)の希望するレベルの合格を目標に掲げ、これに沿った文法問題を解いていきます。	読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めること、ロシアの文化や社会についてロシア語の文献から読みとる力をつけることが全体的な目標となります。ロシア語能力検定試験、およびT P K Hの各自が目標とするレベルの合格を目指します。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語コミュニケーションⅠ	中国語の発音及び基礎的な文法事項の基礎を固めつつ、中国語のコミュニケーションに必要な知識を習得する。	中国語コミュニケーションに必要な不可欠な発音と基礎的な文法に関する知識と技能を身に付ける。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語コミュニケーションⅡ	中国語によるコミュニケーション(会話と作文)の能力を向上させます。	初級後段階中級前段階の作文能力を身につけることを目標とします。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語コミュニケーションⅢ	一年次の既習内容に引き続き、更に基礎を固め、読解力や表現力などのスキルアップにつなぐことを目的とする。	一年次に習った内容を軸に、留学に必要な音読・訳読ができる。コミュニケーションを取れるスキルがアップできる。表現力を身に付ける。	◎		○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語アプリケーションⅠ	中国語アプリケーションは、SA(Study Abroad)プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。本授業では特に「読む」能力を重点的に育成する。	本授業の到達目標は、これまで積み上げてきた中国語能力を基礎に、長文の読解力を身につけ、それを翻訳力にまで高めることをめざしている。具体的には、中国の報道記事や評論文を辞書やネットを使用しながら十分に読めるレベルを目標としている。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語アプリケーションⅡ	中国語アプリケーションは、SA(Study Abroad)プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主に「書く」能力を重点的に育成する。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1) テキストに提示されている説明を精読し、中国語文法の特徴を深く理解する。 (2) 日文中訳や並べ替え問題、自由作文等を通じて、難易度の高い中国語文を適切に作る事ができる。 (3) 中国語と日本語の表現方法の違いを把握し、適切な翻訳ができるようになる。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語アプリケーションⅢ	中国語アプリケーションは、SA(Study Abroad)プログラムによる留学を終え、中級レベル中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主に「話す」能力を重点的に育成する。	本授業の到達目標は以下の通りである： 1、正確な発音で中国語を話す。 2、日常会話を流暢に話す。 3、留学や就職などのために高度の会話能力を身に付ける。	◎	○	○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	中国語アプリケーションⅣ	中国語アプリケーションは、SA(Study Abroad)プログラムによる留学を終え、中級レベルの中国語コミュニケーション能力を有する学生を主たる対象として、留学中に培った中国語コミュニケーション能力の維持及び向上を図ることを目的とした授業である。 中国語コミュニケーション能力の維持、向上のためには、「読む、書く、聞く、話す」という四技能をバランスよく育成することが必要であるが、本授業では主にe-Learningを利用した「聞く」力と「読む」力を重点的に育成する。	HSK5級と6級の高スコア取得に必要な「聴力」(リスニング力)と「閱讀」(リーディング力)を身につけるとともに、これらの教材を活用して「会話」(スピーキング力)を高める。	◎	○	○	△
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	スペイン語コミュニケーションⅠ	El objetivo de este curso es que los alumnos se familiaricen con el español hablado. Llevaremos a la práctica, mediante conversaciones sencillas, los conocimientos gramaticales que ya hayan adquirido y los que vayan adquiriendo. Cuidaremos la correcta pronunciación y entonación.	Que al final de este curso los alumnos sean capaces de entender y desarrollar en español conversaciones sencillas de la vida cotidiana, ese es nuestro objetivo principal.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	スペイン語コミュニケーションⅡ	Nuestro objetivo es elevar la capacidad de comprensión y expresión, fundamentalmente oral, de los alumnos. La ampliación y enriquecimiento de su vocabulario será uno de nuestros principales objetivos.	Nos proponemos que, semana tras semana de clase, los alumnos vayan adquiriendo una mayor destreza en comprender y expresarse oralmente en muy diversas situaciones.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	スペイン語コミュニケーションⅢ	Nuestro objetivo es, como en los cursos anteriores, elevar la capacidad de comprensión oral de los alumnos y su destreza en expresarse oralmente.	Tienen que conseguir aumentar considerablemente su vocabulario y su capacidad de comunicación para su próxima ida a España. Antes de ese momento, nos proponemos que lleguen a un nivel que les permita aprovechar al máximo su estancia y sus clases en España.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	スペイン語アプリケーション①～④	Mantener y elevar el nivel del idioma español que los alumnos han logrado hasta el momento. Campos que vamos a tratar y destrezas que vamos a intentar reforzar lo más posible: comprensión y expresión, oral y escrita, gramática y vocabulario.	Mejorar su capacidad comunicativa en el idioma español.	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語コミュニケーションⅠ	春学期の学習内容を理解しているという前提で、文法と語彙をさらに学び、複雑な表現ができるようにつとめます。	授業で学んだ文の読み書きができ、声に出して言えるほか、自分で文を作り出す力(=言いたいことが言える力)をだんだんと身につけていくことが目標です。	◎	△	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語コミュニケーションⅡ	「話す」「聞く」力の一層のレベルアップを計り、重なる「話す」「聞く」訓練を通して、自信を持って自然な朝鮮語の会話を身に付けていくことを目指します。今まで習った朝鮮語の力を、会話で様々な場面に活用できるように、そのスキルを一層磨いていきます。	SAに行った時のために、ある程度の生活会話が可能になることがこの授業の到達目標です。自分で考えてあらゆる場面で自然な表現ができるように、会話の力を磨いていきます。	◎	○	○	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語コミュニケーションⅢ	1年次で学んだ文法と語彙の基礎の上に、「読む、書く、聞く、話す」の各能力を総合的に向上させることを目的とします。 2年次秋学期のSAに備えます。	SAに通用する語学力の習得、具体的には韓国外国語大「韓国語文化教育センター」の「3級」に編入できることを目標とします。	◎	△	○	○
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語アプリケーション①	既に持っている朝鮮語の知識を活用したり、もっと包括的に知識を吸収できることを目標とします。韓国の新聞、雑誌、映像などを使って、テキストには出ない、自然な朝鮮語の使い方や、多様な表現と新造語を学んで自ら表現できることを目指します。授業はできるだけ朝鮮語で進めていきます。	朝鮮語のニュースや韓国の番組を字幕なしで理解できることを到達目標とします。	◎	○	◎	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語アプリケーション②	既に持っている朝鮮語の知識を活用したり、もっと包括的に知識を吸収できることを目標にします。韓国の新聞、雑誌、映像などを使って、テキストには出ない、自然な朝鮮語の使い方や、多様な表現と新造語を学んで自ら表現できることを目指します。授業はできるだけ朝鮮語で進めていきます。	朝鮮語のニュースや韓国の番組を字幕なしで理解できることを到達目標とします。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	言語コミュニケーション	朝鮮語アプリケーション③	一定のテーマを決めてディスカッションをやったり、韓国の文学作品を読んで、韓国の伝統・習慣・文学表現を習い、朝鮮語のレベルアップをはかります。朝鮮語の総合的能力の定着を目指すのがこの授業の目標であります。	積極的に韓国語によるディスカッションに参加したり、韓国の文学作品も読めることを到達目標にします。	◎	○	◎	
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション	情報コミュニケーション I	体験をデザインする「面白さ」&「奥深さ」を、実践的に学ぶ科目 わたしたちの日常生活はたくさんの道具であふれている。日常生活で出会う道具には文房具のような小さなモノからアミューズメントパークのような大きなモノまである。それらの道具が魅力的で使いやすいと日常生活も豊かになる。 このワークショップでは、「道具を使いやすくデザインする方法論」と「新しい近未来の道具のデザイン」という2つのテーマに取り組み、「道具をデザインする」という一見難しく思える課題を、手法の習得と実践の両方をバランスよく配置して、実践的に学べる科目である。 ● ユーザーを調べ、道具をもっと使いやすくデザインする 講義の前半では、「道具の使いやすさ」に着目する。日常に溢れている道具を、人間にとって使いやすいものにするにはどのようにすればいいか？ その手掛かりは、ユーザーの特性と、ユーザーに起こっている出来事の的確な理解にある。使いやすさの観点から道具を改良する具体的な方法論を、実習を通じて学ぶ。 ● 新しい、近未来の道具をデザインする 講義の後半では、「新しい近未来の道具のデザイン」に着目する。まだ存在しない未来の道具をデザインするにはどのようにすればいいか？ その手掛かりはユーザーの潜在的なニーズの把握にある。利用者の生活が豊かになるような近未来の道具を考案し、コンセプトをデザインするための方法論を、実習を通じて学ぶ。	「道具をもっと使いやすくデザインすること」「新しい近未来の道具をデザインすること」、この2つをテーマとして、デザイン手法を実践的に学ぶ。 ● 2つのテーマでは学習内容が異なる。各テーマの基礎となる基本的な考え方、理論、調査計画の立て方、評価方法、データ収集方法、分析方法を学び、実践できるようになる ● グループワークの進め方、結果のまとめ方、成果発表の技法を学び、実践できるようになる		◎	○	◎
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション	情報コミュニケーション II	文化研究と成果発表の方法を身に付ける 【情報コミュニケーション I ～ III 共通テーマ】 文化情報学のいくつかのテーマについて情報スキルの重点的訓練を行う。コンピュータ取組を用いた実験・実習を通じて実験計画・結果分析・専門文献調査・考察・報告など方法論的訓練を行う。 【情報コミュニケーション II の学習の目的】 本講義の前半において、Study Abroad環境すなわち在外環境におけるネットワークの実践的スキルと問題解決の方法を学ぶ。本講義の後半では、文化情報編集のツールを取り上げる。WeblogやWebサイト構築、小冊子の編集を例に、SA等の在外環境も含めた総合的な情報発信の有効性を学び、Web環境での有機的な情報共有を体験することを目的とする。	SAや卒業研究などのフィールドワークにおける異文化研究を成功させるために、文化情報の調査研究の方法論を身に付ける。インターネット環境を十分に活用し、学習成果を公開し蓄積する。現地調査で得られた知見や体験をリアルタイムに共有することでネット社会にフィードバックできる。		○	△	○
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション	情報コミュニケーション III	「情報コミュニケーション III」は、情報デザインに関する入門的、実験的な実習授業です。ロゴタイプやシンボルマーク、ビクトグラムやイラストレーションなどのデザインやアートに関わる基本的なトレーニングを行います。 作品制作と並行して行う毎回のレクチャーを通じて、デザイン概念と視覚言語に関する理解を深めます。 対面授業では、多くのアーティストやデザイナーに使用されているクリエイティブ系ソフトAdobe Illustrator, Adobe Photoshopの基本的な使い方を学びます。(授業を遠隔で実施する場合には、手書きもしくはPowerpointで代用します。)	作品制作を通じて、人と人のコミュニケーションを円滑にする視覚表現の基礎的なトレーニングを行います。加えて創作活動全般にも通じるクリエイティブな造形表現に必要な知識や感覚、技術を養います。 絵を描くことに苦手意識のある人や、デジタルでの写真加工やデザイン制作が初めての人も難しく考えずに、積極的に手や体を動かすことで作ることの楽しさを体験します。	○	◎	◎	◎
メディアコミュニケーション科目	情報コミュニケーション	情報アプリケーション I	インターネットの発達により、ウェブページを取り巻く技術は近年ますます発展しており、その重要性も増している。近年では、どのような職業であれ、ウェブページの技術と無縁の職業はありえないと言っても過言ではないだろう。 ウェブページを記述するHTMLは近年新しいバージョンが作られ、その表現力が増している。本授業では最新のHTML5をベースに、CSSやJavaScriptなどを用いて表現力の高いウェブページを作るための技法について学ぶ。 JavaScriptやCSSの技術を使えば、アニメーションを表示することも簡単にできるようになっている。最終的にはHTML5を使って簡単な3Dグラフィックスを表現する方法を学び、迷宮のウェブページを構築できることをめざす(完成例としては http://www.edu.u.hosei.ac.jp/~sigesada/software/maze/maze.html を参照のこと。3Dの迷宮を見るにはページの「webglを使って描画する」をチェックする。	ウェブページを記述する言語であるHTMLについて理解し、自分でウェブページを作成できるようになる。 CSSを使って表現力の高いウェブページを作成できるようになる。 JavaScriptを使って動きのあるウェブページを作成できるようになる。 Three.jsを使って3Dグラフィックスを使ったウェブページを作成できるようになる。 インターネット環境で応用力のある豊かな情報発信能力を身に付ける。				◎

分類		科目名		授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
メディアコミュニ ケーション科目	情報コミュニケー ション		情報アプリケーションII	誰でも参加できる自由なモノづくりの世界的潮流、Makerムーブメントについて親しみ、実習形式でオリジナル電子楽器の製作を学ぶ。光、温度、圧力などの変化を検知してスピーカー、ディスプレイ、モーターなどの反応を制御する方法(意外と簡単!)を学び、自分のアイデアを作品として実現させる。	Makerムーブメントの背景と現状について理解する。 楽器音の基本的理解にもとづく電子楽器の構成法を知る。 Arduinoマイコンによるセンサー入力の処理方法が理解できる。オーディオ信号を中心とした出力の制御方法が理解できる。 課題実習と作品制作を通じて、アイデアを成果物に実現する方法を構想できる。 作りながら考える、考えながら作る自由闊達なモノづくりの精神を身に着ける。		◎	◎	◎
専攻科目	情報文化コース科 目群	方法論	こころの科学	<ul style="list-style-type: none"> ● 感動の想い出は、なぜかスローモーション あなたが日々体験している「あなたのこころがはたらいている、という実感」を手掛かりに、「こころ」といふ不思議なものはたまたと、その面白さを様々な角度から理解することを目指す科目である。 ● 「こころ」がはたらいている、と実感するのはどんな時? 「こころ」とはいったい何だろう。「こころ」についてよく知っているつもりなのに、いざ説明しようとするとうまく説明できない、なぜなら、ふだん私たちが、自分の「こころ」がはたらいていることをあまりにも当然に考えているから。 しかし、「こころ」がまはたかたかいない時や、あなたにとって「初めての事、思いもよらない事に出会った時、その“存在”に気づかされる、よく観察すると、世の中は「こころ」によって予想外の現象が実に多く発生している。 ● 「こころ」とはいったい何だろう 「こころ」のしくみを理解する上で基本となる「感情がわく」「気づく」「覚える」「わかる」「語る」「問題を解く」に着目し、解説を加える。学術的な説明の前に、一人ひとりのリアルなこころの経験を整理することから出発しよう。大切なのは、こころがうまく機能している状態だけでなく、上手くはたかたかない現象にも光をあてる、ことである。 ロボットや人工知能の分野では「こころを作ってみる」試みが急速に進む。一方で、「こころ」の探求は、単一の学問領域だけで本質的に迫るのは難しい。心理学に加え、脳科学、人類学や言語学など様々な角度からアプローチが試みられ成果を上げている。「こころの科学」「こころの科学」では、関連領域の知見を踏まえ、学際的な視点から「こころの科学」の基礎を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 感情がわく、気づく、わかる、覚える、語る、問題を解く等、「こころ」のしくみを理解する上で基本となる事柄について、その要点を説明できるようになる ● 感情の役割、アフォーダンス概念など、講義で解説される基本主題について、それらが「こころの理解」にどのような新たな観点を与えるのか、その意義を簡潔に述べることができるようになる 		◎	◎	◎
専攻科目	情報文化コース科 目群	方法論	こころからの現象学	<p>こころからの関係を考える あなたたちは「こころ」が「ありますか」か? 多くの人が「こころがある」と答えると思います。それでは、次の質問です。「それでは、あなたが言うように「こころがある」ならば、それは「どこにありますか?」、ほとんどの人が「頭にある」、より正確には「脳にある」と答えるかもしれません。それでは、「こころが頭(脳)にあるならば、こころと脳とは、どのように関係していますか?」「こころがある」と答えた人に質問します。それでは、「こころは見えたり触れたり、知覚できたりしますか?」。もしも「こころ」が見えたり触れたりできないのに、あなたはどのようにして「ある」と言えるのでしょうか? あなたは「自分で体験しているから」と答えるかもしれませんが、それでは、「自分で体験するから」「こころはある」のですか? それでは尋ねますが、「あなたの体験は、あなたの「どこで」するのでしょうか? こころで体験するのですか? からだで体験するのですか?」</p> <p>私たちは、「こころがからだにある」とか「こころを持っている」と日常生活の中で疑問を持たずに漠然と信じています。ただ、哲学はこうした常識を徹底的に疑います。何も前提にしないこと、それが哲学的立場としての「現象学」のモットーです。そこで「こころからの現象学」といふ本科目は、「こころからの」を考へ、それらがどのように結びついているのか(結びついていないのか)について徹底的に追求していきます。</p> <p>「こころ」は存在しない 人間が思考する能力が始まって以来、「こころ(魂)」について徹底的に考えられきました。それにもかかわらず、「こころ」を十分に理解できたという学説は、自然科学も含めて存在しません。いまだに、「こころ」と「からだ」の関係すら明らかになつたとは言えません。</p> <p>「こころからの現象学」では、「こころの哲学」の歴史から様々な哲学者の見解をおさらいし、「こころの哲学」が具体的にどのような問題に取り組んできたかを学びます。そして、20世紀後半から現在に至るまで、認知科学や「こころの科学」と言われる分野と交流をしながら、新しい「こころからの哲学」を学んでいきます。 2021年度は、新進気鋭の若手哲学者マックス・ガブリエルの「こころ」は脳ではないー21世紀のための精神の哲学(2019)を取り上げ、「こころ」と「脳」との関係を考えていきます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「こころの哲学」の歴史を学ぶことにより、「こころからの」の関係について、哲学的に説明できるようになる。 ● 哲学的な立場としての「現象学」の基礎を学ぶことができる。 ● 「こころからの現象学」を通じて、科学的にアプローチする「こころの科学」との関係性を明らかにすることができる。 		◎	◎	
専攻科目	情報文化コース科 目群	方法論	ゲーム構築論	<p>この科目では、情報学を活用したモノづくりの面白さと楽しさをコンピュータゲームのモノづくりを通して学ぶ。コンピュータにはワープロ、メールソフト、ウェブブラウザ、ゲームなどあらゆるソフトウェアがあり、我々は日々それらの他人が作成したソフトウェアを利用しているが、これらのソフトウェアが実際にどのようにして作られているかについて知っている人はあまりいないのが現状である。そのためコンピュータで何かを行う場合、他人の作成したソフトウェアを探して利用する必要があるので、そのようなソフトウェアが見つからなければあきらめるしかない。</p> <p>実際にはプログラミングを学ぶことで、簡単なソフトウェアであれば必要に応じて自分で作ることができるようになる。つまり、コンピュータのソフトウェアの消費者から、コンピュータのソフトウェアの生産者になることができるようになるのである。</p> <p>日常にあふれるコンピュータのソフトウェアはどのようにして作られているのか? 本授業ではソフトウェアの中でも親しみやすいコンピュータゲームのプログラミングの観点から具体的な方法論を、実験実習を通じて学ぶ。</p> <p>コンピュータゲームの題材としては主に、古いや数当てゲームなどの初歩的なものからはじめ、最終的にはマインスイーパーやテトリスなどの知名度の高いゲームを扱う予定である。</p>	<p>コンピュータゲームのモノづくりを通じてコンピュータのソフトウェアがどのようにして動いているかを理解し、自分の方で簡単なソフトウェアを作り出すことができるような実践的な能力を身に付けることを目指す。</p> <p>2015年度の本授業の学生の作品をeポートフォリオにまとめておいたので、以下のアドレスから参考にしてほしい(TABS→ページの順でクリックすると一覧を見ることができ る)。http://vp.fic.i.hosei.ac.jp/mahara/group/view.php?id=188</p>				◎

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	
専攻科目	情報文化コース科目群	システムと人間	<p>● 道具をうまくデザインすると、暮らしはもっと心地よいものになる。日常生活を観察すると、私たちはさまざまな道具に囲まれている。人間は道具を次々に作り出すことによって身体的・感覚的・知的な限界を超えてきた。しかし現実には甘くない。高齢者や初心者はじめ、使い方がよく分からないので新しい道具を諦めてしまう例も多いのである。</p> <p>暮らしの道具を使いやすくすることは、その人の生活をもっと豊かで快適なものにすることに直結する。道具のデザインは重要である。</p> <p>● では、どうデザインするか？ それには基本がある。本講義では、道具を利用者にとって使いやすく、魅力的なものにするための方法論①「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」②の基本的な考えから、デザイン手順までを実践的に学べる。それは、デザインする際の手順である「ユーザ」について深く理解し、特性を分析する作業から始まる。</p> <p>「モノづくり」、特に道具・家具・文具のデザインに興味のある皆さんの参加を期待する。</p> <p>文化や特性が異なるために摩擦が生じるのは人種や民族間だけではない。ロボットを始め、人が造った人工物と人間も、材質や見かけだけでなく、知的能力、言語コミュニケーション能力、感覚、情動などさまざまな側面において異なっている。このため、人工物と人間の間でも様々な摩擦が生じる。このことを学ぶことは、これからの社会にとって重要な、人と人工物の共生の問題を考えることにも繋がっていく。</p> <p>● ある時代をリードする道具をどのようにデザインするのか、このことが文化を築く視点から見た時、きわめて重要な問題であることに受講生は気づくだろう。このような発展的な課題について考える基礎も身につけよう。</p>	<p>デザイン手法の基礎知識を身につけ、魅力ある企画書を作ってみよう！</p> <p>・使いやすい道具をデザインするための方法論、「ユーザーエクスペリエンス・デザイン」の基本的な考え方、デザインの基本原則から、ユーザ特性の分析方法、デザイン手順まで、実践的に説明できるようにする。</p> <p>・最終課題に取り組むことで、道具・商品・サービスのデザイン案を、利用者のエクスペリエンス(experience=体験)の観点からデザインし、企画書を提案できるようにする。</p>		◎	○	◎	
専攻科目	情報文化コース科目群	システムと人間	<p>PCや携帯電話などのようにネットワーク接続する情報機器を使用する際、ウイルスなど意図しないプログラムを引き込んで、被害にあうことがある。情報技術が社会基盤となり、広く一般に利用される一方で、セキュリティや個人情報保護等の問題も広く認識されるようになってきた。この授業では、身近に利用している情報サービスに対するリスクや脅威を学習し、情報セキュリティやプライバシー、および匿名性に関する議論を行い、有効にネットワークを使用するため、ネットワークユーザ個人として、あるいは組織のネットワーク管理者としての基本的な知識と情報管理技術を身につけることを目標とする。</p> <p>ネットワーク上のウイルス等の脅威から身を守るためには、ファイアウォールやアンチウイルスソフト等に代表される情報システムの手法と、ルールや法律によりそれを抑止する手法がある。両者を解説する。</p>	<p>・PC等、個人用情報機器を利用する上で、必要な情報セキュリティ知識を身につける。</p> <p>・より高いセキュリティを実現する方策を立案できる。</p> <p>・セキュリティを守るためにどのような社会制度があるかを理解する。</p>				○	
専攻科目	情報文化コース科目群	システムと人間	<p>文化という視点からみた生命の実像を学ぶ。</p> <p>内容は大きく2つに分けて、(I-II)「ヒトを取り巻く文化と生物」と、(III-IV)「生物それ自体とその進化」について講義を行う。分野は衛生学、美術、生物学、農業にわたり、生物情報をどのようにヒトが利用しているのかを学ぶ。</p>	<p>ヒトの生活と生物にまつわる歴史、文化そして、現代な問題を解決する方法について、考え理解する。生物の多様性や進化について、考え理解する。現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている。ここでは、生活活動における情報(主に遺伝情報)の特徴とその役割について、現代生物学の手法を体験し、現状を理解する。</p>		○	◎	◎	○
専攻科目	情報文化コース科目群	システムと人間	<p>生物は、それぞれの生活環境に適した結果、多様性に富んだ進化的道を進んできている。多様な環境条件下で生活しているヒトは、環境に適応するためにさまざまな技術や思考を創造してきた。人間の活動と環境の相互作用によって構築される文化に着目し、自然科学及び人文社会科学の多面的な視点から、ヒトを取り巻く環境から得られる情報と文化の成り立ちや持続可能な社会について学ぶ。</p>	<p>人間社会や文化が、生態系とどのように関わっているのかについて考え理解する。現代の生物学は情報科学的側面を強く持っている。ここでは、生態系、地球環境と、人間生活、食文化、病気などについて、現代生物学、栄養学、医学、保全生態学の観点から現状を理解する。</p>		○	◎	◎	○
専攻科目	情報文化コース科目群	メディア	<p>● 人工物を次々に生み出すことで自らの限界を超える。人間は自然界で非力な存在である。人工物を次々に生み出すことで、自分の身体的・感覚的・知的な限界を超えてきた。その結果、この世界は自然的な世界と言えなくなりつつある。むしろヒトが作り出した人工の世界の中で生きていく、と考えるほうが自然だろう。</p> <p>● 人工物が消える ④Society 5.0 ⑤の後、どこに向かう？ 人工物は、文具や玩具のように人間から独立した分りやすいモノだけではない。身体に装着する義足やコンピュータを埋込んだ衣服、脳液で動作させる道具やクルマなど、ヒトの身体や能力と一体化して機能する人工物もある。暮らしの至るところに埋め込まれた知的人工物に、やがて気がつくなくなると思われる。またスマート住宅のように人間を包み環境として存在する人工物もある。</p> <p>● 本講義を通じて履修者は、「人間と人工物の一体化と拡張」という一見矛盾する2つの現象と、今後発展する方向性を、まず「人工物の科学」(H.A.サイモン)を理解することから始め、それをベースとして「知的人工物との暮らしのデザイン」について学ぶ。講義の終わりに、高層建築や「都市」もある意味で空間化した知的人工物として捉えることができるようになる。</p>	<p>・人工物とは何か、それはどのように登場し、人間のもつ制約をどのように拡張してきたのか、「人工物の科学」の基礎を理解する。</p> <p>・知的人工物が変化を感じ取り環境に適応するための技法として、知識表現、ニューラルネットワーク、遺伝的アルゴリズムの基礎を理解する。</p> <p>・人間と人工物の共生を捉える幾つかの分析視点を学び、ある具体的な場面を切り出して、人工物によって拡張された暮らしのデザインに取り組む。</p>			◎	○	◎
専攻科目	情報文化コース科目群	メディア	<p>PCでシンセサイザやエフェクタを自作する。音楽や音声を扱うプログラムを作る。本講義では、音を扱うためのビジュアルプログラミング言語であるPure Data(Pd)を使って、さまざまな音の表現方法を学び作品を制作する。人間の表現行為を工学的に扱うことで、人間と機械のよりよい協調をマルチメディア、特に音楽や音声などオーディオがメディアにより実現したい。同時にCMIDIやOSDCによる他の機器との連携、ネットワーク環境での利用、IoTなど現代的な利用のあり方を学ぶ。</p>	<p>コンピュータ上で、音を生成する方法や、音の大きさ、長さ、音色、発音タイミングなどを制御する方法を習得し、サウンドプログラミングの基礎が理解できるようにする。Pure Data(Pd)に習熟しビジュアルプログラミングの考え方をコンピュータ音楽への応用が身につく。オープンソースソフトウェアとしてのPdの利点を認識し、Windows、MacなどOSや機器の違いに影響されない作品作り、電子楽器とコンピュータとの連携を構想できるようにする。音響モデリングの実現例が切り開く先進的な音響処理の分野を理解できるようにする。</p>				◎	
専攻科目	情報文化コース科目群	デザイン	<p>SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービスの普及、シェアリング・エコミーやサブスクリプション方式等の台頭により、人と人の繋がり方、人と物・事との関係が変化しており、さまざまな価値の変容が起きてきています。このような時代に、家庭や仕事場とは別の第三の居場所(サードプレイス)は、どのような場所であるのかを受講者それぞれが考察しながら、これからの「繋がり方」を考えたいと思います。</p>	<p>受講者それぞれが、授業内で提示された事例を「現代の日本人にとってのサードプレイスとは？」という視点から考察していきながら、現代社会における人と人、人と物・事などのこれからの「繋がり方」を再考察できることを目指しています。</p>		◎	○	△	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4			
専攻科目	情報文化コース科目群	デザイン	情報の編集論(旧:情報編集論)	前半では、映画を題材に、そのストーリーや登場人物、プロットの抽出・分析等を各自が行い、物語を構成している「情報の意味」を考察していきます。 後半では、普段何気なく見ている広告やコマニッシュを構成している要素(情報)を分析しながら、それぞれの「情報の意味」を考察していきます。 これらの考察を通して、「情報の編集」を学んでいきます。	受講者それぞれが「情報の意味」を再考察し、表現することにおいてより効果的な「情報の編集」を試みることができるようになることを目指します。		◎	○	○		
専攻科目	情報文化コース科目群	デザイン	文化情報の哲学	《授業の概要》 本科目は、国際文化学部が提唱する「文化情報学」という新しい学問を哲学的に基礎づけるための科目です。そもそも「文化情報学」とは、様々な文化現象を「文化情報」として捉え直し考察する学問として新しく構築するために考案された学問です。この学問では、それぞれ固有の文化現象のなかに共通する新しい(意味)や(価値)を見出し、「文化情報」として編集しなおして解釈し、「文化情報」としての(新しい意味)や(新しい価値)を創出したり、さらにそれらの(意味)や(価値)を付加して新しく発信することを目指します。 それでは、なぜ「文化情報学」を学ぶ必要があるのでしょうか。私たちは動機をもって物事に取り組むことで、手に入れた「文化情報」を性格選択できます。そうすることで不必要な情報を誤って手に入れることが減ったり、害悪になる情報を飲み込むことを少しでも減らしたりすることができるようになります。 しかしそのためには、性格選択するための「自己-自分(self)」としての「主体性=主観性(subjectivity)」が確立している必要があります。それでは、そもそも「私(自分)」とは何でしょうか。「私」はどのような存在で、どうして存在しているのでしょうか。あるいは、「私」はどのようにして「他者(the other)」とは異なるのでしょうか。これらは哲学的な疑問です。「私」とか「主観」とかを問うと、これらの根本的で哲学的な問いが立ちほだかってきます。 そこで、本授業では、まずは「私」あるいは「自己」を構成していると考えられている「ところ」と「からだ」に焦点を当てて考えてみます。その際に、東洋思想の観点から考察することになります。というのも、私たちが日常生活で感じている「ところ」と「からだ」のあり様が、西洋文化の中で育まれた(西洋)哲学とかなり異なるからです。 【授業の目的】 そこで、本授業では、湯浅泰雄の『身体論—東洋的心身論と現代』(1990)を取り上げ、東洋思想における心身論が、西洋哲学における「心の哲学」とどのように異なるかを明らかにしていくことを目的とします。その際に、湯浅自身がそうであったように、「比較哲学(comparative philosophy)」的に考察することが目指されています。	(1)アジア地域の様々な文化から生み出された「心身関係」を、現代の視点で考えることができる。 (2)21世紀を生きる私たちにとって、「哲学する」ことがいかに重要であるかを学ぶことができる。 (3)哲学的思考を身につけることができる。			◎	◎	◎	
専攻科目	情報文化コース科目群	デザイン	ソーシャル・プラクティス(旧:情報デザイン)	「ソーシャル・プラクティス」では、ソーシャル・プラクティスあるいはソーシャリー・エンゲージド・アートと呼ばれる環境や政治、あるいはコミュニティやジェンダーなど、様々な社会的問題に直接働きかける美術の分野について学びます。 社会と直接関わるような現代美術のアプローチに関する理論と実践についてのワークショップ形式の実習を行います。	この授業では、下記の3つのテーマで実習を行います。 1. 環境と社会 2. コミュニティ 3. ポリティカル・イシュー 自分たちを取り巻く様々な社会的な課題を捉え直し、調査を基に自分なりに課題を設定して作品として表現する力を養います。			○	◎	◎	◎
専攻科目	表象文化コース科目群	表象の理論	サブカルチャー論	サブカルチャーは新興の文化流行として、大衆文化や通俗趣味に分類されるが、表現者たちにより意識が加えられ、いよいよメインカルチャーになってゆく。文学、美術、音楽、漫画、映画、旅行、衣食文化、政治、科学あらゆるジャンルを横断し、文化流行全般の考察を通じ、コミュニケーション能力の土台にもなる種多様な教養を身につける。とりわけ、技術論に焦点を当て、文化の模倣の変容を時代ごとに考察する。	イデオロギーや哲学の代わりにキャラクターやコピーが注目を集め、現代、政治も文化も素人が担い手になってゆく風潮を踏まえ、柔軟な批評精神を獲得し、サブカル全般に関する教養の底上げを図ると同時に、先人の斬新な発想の秘密に迫る。講義内容のまとめや復習は各自が行うが、授業内で行った小レポート等、課題に対する講評や解説は授業の最後にとまとめて行う。				◎		△
専攻科目	表象文化コース科目群	表象の理論	道具による感覚・体験のデザイン	「体験」という個人的な出来事や、受講生がアタマとカラダを使って「体験し直す」ことを目指す科目である。 ● 日常の体験こそ面白い おそらくあなたが体験という言葉から連想するのは、可笑しい体験、驚いたこと、つらかったこと、忘れられない事など、ほとんどが非日常的な体験であろう。しかし体験の本質に迫りたいなら、むしろ、日常の体験の豊かさにこそ目を向けるべきである。本講義によって受講生は、一見些細に思える日常の体験においてさえ、身体のおもむきを感じて研ぎ澄まされ、わずかな世界の変化を感じ取り、豊かに感情が湧き起こり、体験が生み出されていくさまを理解できるようになる。 ● 『体験』から、空間をデザインする 今年度は、「空間の体験」を取り上げる。本講義を通じて受講生は、人間は他人との間にある距離・空間を絶妙にコントロールしながら、互いに巧みな空間行動をしていることを理解できるようになる。たとえばキャンパス、カフェ、エレベーターなど、多くの人々が行き交う場は、人間の空間行動の特性を観察し、解析するには格好の空間である。 「身体は空間を感じ、体験を生み出す。空間のデザインによって、そこでの体験はどのように変化するのか。この理解をさらに、日常の空間をデザインし直すことに取り組む。たとえばもっと快適に安らげるように、あるいはもっと自然な集中ができるように。 ● 体験をデザインする、ということ 「経験」「体験」(Experience)が今ほど注目される時代はない。一方で「経験の危機」も指摘される。仮想世界の浸透も手伝って、私たちの「体験」はかつてない速度で変化が進み、どこかで体験のなかに、その境界はますます曖昧になりつつある。例えば、自分の身体と感覚を使って実際に体験していない出来事であっても、「あたかも体験したかのように」受け入れていることに気づく。本講義を通じて、この現象を、デザインの視点から批判的に問い直すことになる。	受講生はつぎの3つについて、基本用語を使って簡潔な説明ができるようになる。 1) 体験するとはどのようなことか 2) 人間は、どのように空間を身体で感じ、感情を働かせながら、人と人の距離や空間を互いに調節し、巧みな空間行動をしているか 3) 空間の体験は、その空間のデザインによってどのように変化するのか。 そして、これらの知識を用いて具体的対象に対して基本を実践できるようにする。これらを目標とする。				◎	○	◎
専攻科目	表象文化コース科目群	メディア表現	マルチメディア表現法	本科目は、少人数ワークショップによるマルチメディア作品制作の実習です。わかりやすく統一的に提示する手法を少人数ワークショップで学習する。画像、映像、音声など個々の編集技法の基本は既習のものとし、ここでの講義ではそれらの統合をコミュニケーションデザインの観点から学び、アイデアや表現意欲をコンテンツ制作に活かす効果的なワークショップの戦略について学ぶ。またワークショップにおいては学習成果の体得をさらに確実にするために、ビデオ、Webマルチメディア、DTPなどの領域から練習課題を適宜設定する。受講生には各人の嗜好にもとづき映像作品、音楽作品やDTP作品などの個人プロジェクトを提案してもらい、セメスタを通じて制作する。	写真表現、ポスター作り、DTP、映像制作などのマルチメディア実習を通じて、自らの発想を人に伝わるマルチメディア作品の形にすること、同じ課題で制作したお互いの作品を相互批評してセンスを磨くこと、作品をプレゼンテーションすること、これら課題制作の訓練を通じて作品作りの一貫したプロセスを身につける。				◎	○	◎

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	表象文化コース科目群	メディア表現	メディア表現ワークショップ1	表現活動に繋がるフィールドワークに関する実習授業です。各実習はワークショップ形式で行います。 教室や大学の構内外を3つのテーマ(カメラを持って旅に出よう。スケッチブックに記録しよう。動きや音を拾うことから。)によるフィールドワークを行い、その成果をプレゼンテーションします。	みなさんは課題を通じて様々な表現活動に通じる取材・調査方法や様々なメディアを使った表現方法を学びます。 各課題に取り組むにあたっては、自由な発想、臨機応変な対応が必要となります。柔軟な姿勢で(楽しんで)課題に取り組んでください。	○	◎	◎	◎
専攻科目	表象文化コース科目群	メディア表現	メディア表現ワークショップ2	書くことを読むことは表裏一体だが、書く技術の研究を通じ、読み巧者になる手もある。実例を挙げつつ、実作者の立場から小説、エッセイ等の書き方ABCを伝授する。メールから企画書、報告書、論文、創作、これら全ては特定のセオリーに基づいているので、これらを踏まえつつ、説得力や感動を与える手法に触れ、実作を通じて、文章表現の向上を図る。	半期の授業を通じ、受講生は表現意欲や批評意識を刺激されるだろう。自己を語るコトバ、他者とのコミュニケーション能力を磨き上げるには、創作を実践することがショートカットになる。創作のエッセンスを重ねれば、説得力のある企画書の書き方、他者の関心を誘うプレゼンテーションの仕方も自ずと身につけられる。学生はそのスキルの獲得を目指し、課題をこなすこと。	△			◎
専攻科目	表象文化コース科目群	メディア表現	メディア表現ワークショップ3	先端的芸術表現の一つとして、テクノロジーとともに発展・進化し続けるメディアアート。学生はその概念や思考をディスカッションと演習を通して学び、表現の可能性について考える。	・対象をあらゆる角度から観察し観察眼を養う。 ・既成概念にとらわれずに、自らの想いを表現する。 ・アートの可能性を発見する。 ・各目的専門分野に於いて、コミュニケーションの向上に役立てる。		◎	○	
専攻科目	表象文化コース科目群	メディア表現	五感共生論	人は物・事をどのように認識しているのかを、視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の相互の関係を考察していきながら学んでいきます。	それぞれが自身の視覚・聴覚・触覚・味覚・嗅覚の再確認を通して、人の身体感覚を再考察できることを目指しています。		◎	○	△
専攻科目	表象文化コース科目群	映像表現	映像文化論	スタジオジブリ結成以前の高畑勲・宮崎駿のアニメ映画を、欧米のアニメ映画と比較しながら、主に彼らの作品のスタイルや映画史・アニメーション史上の位置を学習する。	1950年代～1980年代前半の日本のアニメの映画的・アニメの特徴や制作体制について学び、現代のアニメ状況がどのように生まれたのかを知ることができる。また、ストーリーだけでなく、ストーリーをどのように表現するかが大事であるというのを理解する。	○	○		
専攻科目	表象文化コース科目群	映像表現	写真論	現在、デジタルが主体となった写真について19世紀中頃の発明前後の歴史的背景から見直し、人間の知覚を拓げたメディアとして検証する。具体的に作品や作家論にも触れ、写真表現の可能性を考察すると共に、あたりまえになっている「見る」という行為を再考する。	写真について、メディアと技術の両側面から基礎的な論点を把握し、歴史や他分野との関係について考察できるようにすること。	△	○	○	△
専攻科目	表象文化コース科目群	映像表現	映像と文学	大好きな小説やマンガが映画化・ドラマ化されたので、観てみたら「納得いかない！私の知っているアレとは全然違うんですけど！」と感じた経験はありますか。この授業では「映像化された文学作品」を例に、文学作品(文字テクニクス)から映画(映像)へというメディア・ジャンル変換の過程を分析しながら、芸術とメディアの関わりや、文学と映画のそれぞれが表現しようものについて、自ら考えを深めていきます。あなたのガッカリした気持ち、あるいは「まあまあ期待以上」という気持ちの正体に、いつとも違う視点から追ってみませんか。	・さまざまな文学作品や映画に触れることで、文学と映画それぞれの形式的特徴や両者の関連、差異について理解を深めること。 ・映画制作において参照された原典がある「現象の分析を通じ、受容美学の基本を学ぶこと。この点は読む人、観る人としての自分を反省的に捉える訓練にもなります。 ・美的な形式(表象文化)の分析を通じ、古典的なメディア論のアーゼの真意を理解すること。 ・「オリジナリティー」「模倣」「引用」「暗示」などの基本的な美学概念に触れ、芸術の社会的構築物としての側面を理解し、批判的思考の術を磨くこと。 ・この授業の種彙を、どんな分野であれ自分のゼミでの勉強や卒論執筆、その他のさまざまな場面に役立てられる自分になること。 その上でこの授業が、皆さんのお気に入りの一作品が見つかる機会になれば嬉しく思います。		○	◎	
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	演劇論	ミュージカルも、テレビドラマも、映画も、オペラも、人形劇も、能も、歌舞伎も、宝塚も、演劇の一つです。音楽・美術・文学・舞踏を含む総合メディアである演劇は、古今東西の人間連の娯楽の中心に常にありました。 この授業では日本の古典演劇と近代西洋演劇との比較を軸に、演劇を構成する様々な要素、演劇を取り巻く様々な問題について考察します。その中で世界の演劇の多様なあり方や、基本的な演劇理論の応用を学ぶことにもなるでしょう。「なぜ我々/自分は演劇を見たいのか」。様々な切り口から演劇を分析しながら、学生の一人一人がこの問への答えを探っていくことになりま。	・近代西洋演劇と対比した、日本古典演劇の特徴を理解する。 ・基本的な演劇理論を理解し、実作品の分析に応用できるようにする。 ・時代や文化、ジャンルを異にする多様な演劇作品の比較分析ができるようになる。		◎	△	

分類		科目名		授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	ポピュラー音楽論	今年度はメディア産業と音楽との関わりを焦点をあてて、ポピュラー音楽史を概観する。音声複製技術を利用した音楽を「商品」として流通させる産業の活動は、20世紀以降の音楽文化の基礎的な要素となった。この授業では、音楽出版社、レコード会社、アーティストマネジメント会社など各事業体の成立過程に着目しながら音楽ビジネスの変遷を辿り、ポピュラー音楽がいかなる経済的な条件のもとで進展してきたかを理解する。	音楽メディアの変遷を理解する。 音楽実践と産業活動の相互関係からポピュラー音楽史を理解する。 各音楽関連事業の役割と関係性を理解する。 インターネット普及以降の音楽環境のあり方を、歴史的な観点から把握し考察できるようにする。		○		○
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	コミックス論	海外で日本のマンガが人気だという話をしばしば耳にします。実際、日本のアニメ・マンガを原語で楽しむために日本語を学ぶ若者の数はおどろくほど多いですが、しかしながら、海外での実態をわたしたちは本当に知っていると言えるのでしょうか。そもそも、日本語での「マンガ」とは何をさしてきたのでしょうか。本授業では、マンガを理論的、歴史的、社会的な側面から概観します。そうすることで、これまで自明視してきたマンガについて、学生諸君が主体的に、また自覚的・客観的に考えられるようになること。それが本授業の目的です。	◆具体的な数字をあげて(数字による類推の限界を指摘しつつ)市場の規模を比較することができる。 ◆マンガの歴史について基礎的な知識を身につける。 ◆マンガがそれほど自明な概念でないことを理解し、説明できるようにする。 ◆普段見慣れた「読んでいるマンガ」について、その表現の仕組を指摘することができる。		◎	○	○
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	空間デザイン論	「空間」は、都市、建築、アート、グラフィック、映像などさまざまなデザイン手法が駆使されたメディアである。各々の領域で論じられている「空間」を講義と体験を通して多角的に理解し、空間デザインを表現・伝達する理論的かつ実践的な方法論を学ぶ。	本講座は、デザイン制作技術を得得するのではなく、空間デザインを操るリテラシーを高めるとともに、空間が背負う社会的・文化的背景や文脈を理解し、表現・伝達する力を養うことが目標である。講義を通して理論を学び、フィールドワークでは第一線で活動している訪問先の研究者、学芸員、デザイナー、建築家などの生の声と空間の実体験から、様々な立場で建築、都市、アートに関わる際の実践的な理論を学ぶ。	△	○	◎	△
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	比較表象文化論	学生は、オリエンタリズムとジェンダー論、それぞれについて基本的な枠組みを学んだあと、オペラ、バレエ、映画、舞台などの具体的な作品に対して、理論を応用した分析を試みていきます。	・作品分析のツールとして理論を使いこなす力をつけるとともに、様々な表象文化作品の比較分析に必要な、基本的な能力を身に付ける。 ・作品をとりまく時代・社会・文化が作品にどのように反映されているのか、また、伝達手段(メディア)が作品の表現にどのような影響を与えているのか、という表象文化分析に必須の問題意識を高める。			◎	◎
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	異文化と身体表現	いくつかの舞踊の発生の経緯、発展のプロセス、文化的意義について学ぶ。身体運動のメカニズムや表現技法を細かく分析するのではなく、宗教、性、習俗、観光文化といった身体にまつわる社会的な問題を、舞踊を通して、異文化という視点から理解する。	・舞踊の歴史的・文化的背景を叙述することができる。 ・諸地域ごとの舞踊の知識を踏まえつつ、日本の能、歌舞伎、文楽等の特徴を、日本文化を知らない人に対して説明することができる。		○	○	
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	パフォーマンスの美学(旧:パフォーマンス・スタディーズ)	本授業の目的は、「美学・感性学(aesthetics)」の立場から、文化的・政治的・社会的な文脈で身体を用いて表現された「パフォーマンス(performance)」の「美しさ」を追求することです。 2021年度では、私たちの(からだの美しさ)に着目しながら、(からだ)がどのように表現されてきたかを「ボディ・スタディーズ(Body Studies)」の観点からアプローチすることを試みます。その際に、特に「セクシュアリティとパフォーマンス」というテーマで、特定のアーティストが「パフォーマンス・アート」の手法を用いて、積極的に自らの性/アイデンティティーを問題にしていることを考察します。	(1)アートについて、既成の価値観・マスメディアの流す価値観に対する、批判的視点をもつことができる。 (2)自らの価値観を問い直し、新たに刷新するための表現手段を具体的に説明することができる。 (3)高校までの芸術教育や制度的なアート認識を新たに問い直し、自らの視点で「パフォーマンス」を、パフォーマンスを用いたアートについての鑑賞方法や参加方法について、説明できる。 (4)アートの領域の内部で生じた、20世紀以降のさまざまな変遷を辿ることで、「前衛芸術」のあり方について、現在のパフォーマンス・アートのあり方を予測することができる。 (5)「パフォーマンス・スタディーズ」の基本について学ぶことができる。			◎	◎
専攻科目	表象文化コース科目群	表象芸術	現代美術論	今日の現代美術の世界は、様々な分野の最先端の芸術(美術、建築、音楽、パフォーマンス、映像、詩など)が複雑に交差しながら形成されています。この授業では、現代美術に関する理論と実践について講義します。現代美術のコンテクストを社会学、人類学や科学と比較参照し、多文化・関係性・コミュニケーションなどをキーワードに読み解いていきます。	講義では、現代美術と関連のある芸術分野についても扱い、様々な芸術の分野における実験的なアプローチを検証し俯瞰することで、それらの基本となる考え方やアイディアについて学びます。 みなさんには馴染みの深い分野であると思いますので、最初に美術史や美術理論の基本的な知識を確認します。また、講義の間にワークショップ(感覚的、体験的に学ぶこと)を行い理解を深めます。	○	◎	◎	◎
専攻科目	言語文化コース科目群	世界の中の日本文化	世界の中の日本文学	【2021.1.19更新】これまで、世界文学の「正典(カノン)」は、日本文学、イギリス文学、アメリカ文学、フランス文学、ドイツ文学というように、国別、言語別で編纂されることが多かった。しかし、一つの国、一つの言語に限定される文学の捉え方から、世界の中で文学を幅広く捉える「世界文学」という概念も広まっている。「母語の外に出て創作する作家たちが多く生まれている現在において、世界文学の視点は文学研究に欠かせない。この授業では、「世界の中の日本文学」/日本文学の中の「世界」をテーマにして、世界文学の基礎的な知識や近代日本文学の歴史を学びながら、現代社会の重要なトピックと文学を繋げるための視座を身につける。	1. 世界文学についての基礎的な知識や理論を身につけ、具体的な日本文学のテキストを分析できるようになる。 2. 日本文学を通して世界を見つめ、歴史や社会と文学との関係性について自分の考えをまとめられるようになる。			◎	◎
専攻科目	言語文化コース科目群	世界の中の日本文化	世界の中の日本語	外国語を学んだつもりが忘れ、海外の文化に触れたつもりですらばけける。現代社会ではおなじみのこの悲喜劇の一面は、そもそも日本語と日本文化に対する理解の浅さに起因するのではない。言葉や文化はどのように出来上がり、どのように相関するのかが、この授業では幕前から二十世紀末までの日本を、海外との応答関係のなかで見つめてみたい。それは物理的な交流でもあるが、それ以上に、言葉と媒介とする交流である。したがってこの授業では原典のみならず英訳されたテキストにも目を向け、必要に応じて外国文学との比較にも供してみる。講義は春学期に開講される「日英翻訳論」と響き合う内容となっている。	比較的な視点に立つことで、自国の言語や文化を海外のそれと横並びに眺め、客観的な方法で評価を加え、それを言語化できるようになる。文学作品を深く読み解く技術が身につく。英語のテクスに触れることで、語学的な運用能力も向上する。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。	◎	◎	○	

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化コース科目群	世界の中の日本文化	日英翻訳論	英訳を通して日本語に触れることは、ときに日本語のみを媒介とするよりも明瞭に、日本語の実像を描き出してくれる。その果てに見えてくるのは日本語に特有のもの、すなわち日本語のエッセンスであるから、実はこの授業のタイトルは「日英翻訳不可能論」とすべきである。この授業では、とくに「裸」の状態に近い日本語に触れるために、古典の英訳を中心にとりあげる。講義は秋学期に開講される「世界の中の日本語」と響き合う内容となっている。	英語の運用能力が向上すると共に、受験勉強の「負の遺産」をなげうち、自由なアプローチで古典本来の味わいを楽しめるようになる。現代言語学を中心とする文学理論の知識が身につく。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	世界の中の日本文化	実践翻訳技法	日本文学の代表的なテキストを英語に翻訳する。原文に忠実でありながらすべれた英語の表現をめざす。	日本語と英語の本質を理解すること。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅰ(現代中国社会)	中国は歴史的、文化的そして経済的にも日本と関係が一番深い国である。しかし、マスメディアを通して報道される中国はあまりにも政治経済に偏りすぎており、しかも表面的なものが多い。中国の一般庶民の日常生活や物の考え方についてどれだけ日本人は知っているのだろうか。この授業ではマスメディアとは異なった物差しで中国を紹介し、中国を実物大で理解できるようにすることを目指している。	中国に関するリテラシーの力を高め、実物大の中国を知ることによって中国に対するステレオタイプな見方から自由になる。		◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅱ(多民族社会中国)	中国文明は、多様な風土のなかでそれぞれ独自の歴史と文化を築いてきた諸民族と漢族との、古くからの交流によって形成されてきた。この授業では、民族の多様性を紹介するとともに、20世紀以降、国家統合を進めるなか、各少数民族社会において生じた変化を通して、中国における国家と民族集団との関係、民族間関係、民族意識、民族文化の現状などを紹介する。	「民族」をキーワードにして中国を読み解く力を養う。		◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅲ(日中文化交流史)	二千年以上に及ぶ交流の中で、中国の人々は日本にどのようなイメージを持ってきたのか。各種文庫や映像資料を通して、古代から現在までの対日イメージの変遷を概観し、そこから何を学ぶことができるか考える。	中国の人々の対日イメージがどのように変遷してきたのか、また、いかなる要因によって変化したかを歴史的に理解することにより、この隣国の人々とのようにつきあっていくべきかについて、適切な判断ができる力を身につける。	△	◎	◎	△
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅳ(中国語の構造)	初級中国語の学習を終えて、学ぶべき文法項目は一通り学んだにも関わらず、中国語文法の全体像や細かい点が明確に把握できていないと感じている人は多いだろう。本授業では、初級中国語の文法事項を復習しつつ、より発展的な内容を学び、中国語文法の体系的知識を身につけることを目標とする。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1) 初級中国語で学んだ文法項目を確実に定着させる。 (2) 応用的・発展的な文法項目を学び、中国語文法を体系的に理解する。 (3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようにする。	◎	○		
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅴ(中国語と日本語)	初級中国語の学習を終えて、中級段階に進んだ際に、難易度の高い中国語の意味を取り違えたり、中国語作文において間違えた表現を使った経験がある人は多いだろう。また、留学先で中国人日本語学習者の日本語に触れた時、その日本語が不自然と思いつつもその理由をうまく説明できないという経験をした人もいるかもしれない。本授業では、このような誤用例にスポットをあて、なぜそのような誤用が起きるのか、どのような表現にすれば適切な中国語/日本語表現になるのかを的確に分析できる力を養う。また、日中対照研究的視点から中国語を見ることにより、普段何気なく使っている日本語の文法的特徴を考える視点も養う。尚、受講に当たっては、本シラバス末尾に記載の【その他の重要事項】も確認しておくこと。	本授業の到達目標は以下の通りである。 (1) 中国語/日本語学習者の誤用例の検討を通じて、その原因を自分なりに説明できる。 (2) 関連する論考や資料の講読を通じて日中両言語の文法的諸特徴を適切に理解する。 (3) 比較的難易度の高い中国語を適切に理解・表現できるようにする。	◎	○		
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅵ(古典思想・文学)	この授業では、代表的な中国古典のうち『論語』『易経』『老子』『荘子』『孫子』を取り上げて、その内容を学んでいきます。これら諸子百家の思想はしばしば独立した対立するものとして扱われますが、実際には古代社会の人々の精神文化の基層となっていくかの論理を共有しています。実際に古典を読み解いていく中で、そうした中国文化の基層的論理が、二千年以上の時を超えて現代社会においても機能している事例を発見できるようにします。	* 中国古典が現代まで読み継がれてきた経緯 * 中国古典を現代語訳で読むときの注意点 * 中国古典の背景となる当時の社会環境 以上の内容を学ぶことで、中国古典の基礎知識を身につけ、現代の日本社会をより深く理解するための比較対象として中国古典を活用できる力を身につけることを目指します。	○	◎	◎	△
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅶ(近代文学)	20世紀初め、中国でも言文一致運動(「文学革命」)が提唱され、「近代文学」が誕生します。中国近代文学は、近代以前の文学のあり方をどのように変革しようとしたのでしょうか。またそれは、欧米や日本の近代文学とどのような点で共通し、どのような点で異なっていたのでしょうか。本授業では、そうした問いを通して、中国近代(社会・文化)の歩みを文学の視点から考えます。	中国近代文学とその歴史的・社会的背景への認識を深めるなかで、中国近代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。		◎	◎	

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅷ(現代文学)	1949年「新中国」建国後から現在までの文学を振り返ります(教養、映画も取り上げます)。中国大陸に限らず、中国語圏である香港や台湾の文学を含みます。	中国現代文学とその時代的・社会的な背景への認識を深めるなかで、中国現代の社会と文化を理解する重要な手がかりを獲得していただければ、と思います。		◎	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅸ(中国俗文学)	SAを機会に日本文化について改めて考え直す機会を得た人も多いだろう。しかし、日本文化とは何かを考えるには、古来、日本文化に多大な影響を与えてきた中国文化への理解が不可欠である。 この授業の目的は巨視的・微視的という二つの視点から中国文化史を通観することにある。 巨視的な視点からいえば、中国文化が東アジアの諸民族に及ぼした影響は計り知れない。表意と表音という二つの機能を備えた漢字の発明は、言語を異にする東アジアの諸民族に漢語という共通言語(Lingua Franca)を与え、それを基盤とする文明圏の成立と高度な精神的交流を可能にした。漢代以降、中国の国教となった儒教は、東アジアに倫理観にもとづく国際秩序と社会秩序を与え、サンスクリット語仏典の漢語への翻訳は東アジアに仏教という世界宗教を成立させた。紙や印刷術の発明は東アジアのみならず、世界の文化の発展と普及に革命的な影響を及ぼした。 いっぽう微視的な視点からいえば、中国歴代の文学、とりわけ市井の人々の間で次々と生み出された俗文学は、東アジアに庶民の文学を生み出す契機を与えた。この授業でも取り上げる三国志演義や水滸伝などは、わが国の文学にも多大な影響を与えている。	中国の古代から近世に至る文化史を理解し、東アジアという広い視野から自文化を考え、説明できる力を身につける。		△	◎	◎	△
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	中国の文化Ⅹ(歴史)	言語・儀礼・服装など日常生活と密接な関係を持つ事柄から始め、近現代中国の世界へと入っていく。日本人にとっては隣国でありながら遠く感じられている中国の存在が、より一層身近になるようにすることが本授業の目的である。中国文化の中から幾つかのトピックを取り上げ、その歴史的な背景・影響を紹介・解説する。	現在、日中間は改善に向かいつつあるが、両国民間の信頼関係は十分とは言えない。その原因を追究するには、近現代の日中間関係を避けて通ることはできない。19世紀末に日中両国の地位が逆転してから今日にいたる日中間関係が、現状どのような因果関係にあるのかを、この授業で知ることができる。そのうえで日中間の相互信頼の醸成にいたる可能性を探り、異文化理解の方法を習得することができる。			◎	◎	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	朝鮮語圏の文化Ⅰ(朝鮮半島の文化史)	朝鮮半島は、日本の隣国、隣人であり、地理的にも歴史的にも、日本と密接な関係のある地域です。この授業では、朝鮮半島の文化や歴史、社会についての基礎事項を学びます。近年、朝鮮半島は、アジアへ、また世界への影響力を増しています。長い歴史の中で、朝鮮半島は、中国の影響を受けつつも、独自の文化・歴史を形成し、さらには日本へも大きな影響を与えてきました。朝鮮半島についての基本的な知識を身につけ、あるべきパートナーシップとは何かを探求することを目的とします。	朝鮮半島独特の文化や歴史に関する基礎知識を身につけることによって、日本など周辺国との類似性や差異性についての考察ができるようになり、また東アジア全体を見渡すことができる広い視野を獲得します。さらに興味のある分野について、自分から引き続き勉強を続けていけるような力を身につけます。			◎	◎	
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	朝鮮語圏の文化Ⅱ(朝鮮語の構造)	朝鮮語を音声、文字、語彙、文法などさまざまな面から言語学的に観察することによって、朝鮮語の力を高めるのに(さらに言えば他の外国語を学ぶにあたって)役立つ知識を提供することを目的としています。 具体的には大学入試センター試験「韓国語」を解く一方で、必要に応じてプリントを配布しながら、上の内容について解説を進めていきます。それ以外に、日頃接する機会が少ない、北朝鮮の言語と、さらに方言と古語の「さわり」をやりたいと思っています。	この授業は、実践的な語学力をある程度もつてであろう受講生が、その裏にある文法や語彙などの「ルール」を理解することで、ブローカーではないきちんとした語学力を身につけるのに役立つことを目的としています。	◎	○	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	アジアの文化	アジアの伝統芸能	中国には「戯曲」と総称される300種あまりの伝統歌劇と「曲藝」と総称される400種ほどの語り物がある。こうした芸能を通じて、中国庶民の文芸世界を垣間見ようというのが本講義の目的である。中国の庶民が、どのような物語に笑い、怒り、涙したのかを、彼らが一番身近にあったメディアを通じて追体験していく。 授業では、できるだけ多くの映像資料を使い、中国の伝統芸能とそこから生まれた音楽や映画などの世界を体感していきたい。	この授業を通じて、中国の伝統芸能の全体像とその代表的作品、演出・技法などを体系的に学び、そうした伝統文化が新たな文化の創出にどのような役割を果たすかを理解することができる。			◎	◎	○
専攻科目	言語文化コース科目群	ユーラシアの文化	アフロ・アジアの文化	日本人にとって意識の上で一番遠いと考えられるのが「アフロ・アジア」地域、つまり北アフリカから中近東にまたがる地域のことである。 本講では、「地理的」あるいは「歴史的」にこの地域にアプローチを試みるのではなく、主にユダヤ教・キリスト教・イスラームという精神的(宗教的)な面からのアプローチを試みる。これらの宗教を、可能な限り現在の我々日本人との関係に重点を置いて紹介したい。	2011年の「アラブの春」以降、ガザ地区におけるハマスとイスラエルの戦闘、また先が見えないシリアのアサド支持派と反政府派との戦闘、さらにそのシリアおよびイラクのシーア派政権に対抗して勢力を拡大するIS(イスラム国)、シーア派のイランとスンナ派のサウジの対立など、この地域で起こったまた起こりつつある事態に対して、正確な知識を得て、この地域に関するメディア・リテラシーを高めることが目標である。			◎	◎	
専攻科目	言語文化コース科目群	ユーラシアの文化	ロシア・中央アジアの文化	本講義では、中央アジアの過去と現在について、特にロシアとの関係性に注目して学ぶ。	(1)ロシアおよび中央アジア諸国の歴史と現状に関わる様々な事項を説明できる。(2)ロシアと中央アジアの類似点及び相違点について自分なりに考察できる。	◎	◎	△		

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP1	DP2	DP3	DP4	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	ロシア・東欧の文化	ロシアおよび東欧諸国は、宗教、民族、イデオロギー、国家間の勢力均衡などの問題により、絶えず、支配被支配関係をさまざまな形で築いてきました。ソ連崩壊後、大方がEU加盟を果たした東欧諸国。今日、これらの国々に対しては、中東欧という呼称が定着しつつあります。東欧という位置づけは、ロシア・ソ連との関係性、そして地理的・歴史的諸要因から考察される必要があるでしょう。この講義では、ロシアと東欧諸国それぞれの民族的差異や特殊性を、主に文化や風土、歴史を通して見る一方で、それぞれの関係性に焦点をあてる作業も行い、文化の相違を確認すると同時にナショナリズムの問題を提起していきます。さまざまな情報から、国家や民族のありかた、複数の国家や民族が共生するとはどういうことなのか、学生のみなさんに考えてほしいと思います。SAロシアの2年生は必ず履修してください。	この授業は、受動的に講義を聴いたり映像を鑑賞するのではなく、多数の情報から自身の感想や見解を導き、教員が提起した問題に対して意見を短時間のうちに適切な文章でまとめる力をコメントシートを通して養うことも目的としています。つねに問題意識や批判的視点を抱きながら、授業に臨んでほしいと思います。	◎	◎	△	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	ドイツ語圏の文化 I	【近現代ドイツの歴史と文化】 ドイツ語圏のうら、主に近現代のドイツとオーストリアを扱います。日本が明治維新に導かれた頃、ドイツも欧史上初の国家統一をなし、近代国家としての一歩を踏み出しました。ドイツ帝国の成立から二度の大戦、東西冷戦と分断国家の成立、ドイツ再統一とその後に至る歴史を、文化と芸術を通じて概観します。	第1の目標は、近現代ドイツ語圏の文化と歴史に関する理解を深めるとともに、抽象的概念や文化に対する知的なアプローチの方法を学ぶことです。 第2の目標は、アイデンティティの実体や困難に対する思考・反省能力の涵養です。「ドイツっぽいもの」の不確かさと同程度には「日本ならではの…」の正体はあやしいものかもしれません。当たり前を疑うことの価値とその面白さを、「ドイツ語圏」を通じて体験してみてください。 第3の目標は、表象文化や芸術の形式分析を通じて、抽象的な議論になれることです。文化現象を知的に理解し楽しめる能力は、わたしたちの人生を楽しく豊かに彩るだけでなく、21世紀の「グローバルな人」に求められる資質です。	△	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	ドイツ語圏の文化 II	ドイツ(昔のドイツ・東ドイツ・西ドイツ・統一後のドイツ)とオーストリア、スイスにおいて、ドイツ語で書かれた文学作品を読む。それによって、ドイツ語によって構築される文化についての考察を行う。加えて、他の文化圏への参照を行う。 言語使用における理解の仕組みについて考え、インターカルチュラルリティとインターテクスチュアリティという重要な概念を中心に置き、言語テキストを解析することを通して、異文化間の理解と誤解の事例としてテキストを分析する。 言語芸術としての文学作品の作品性も合わせて分析する。 ☆作品は、日本語翻訳として出版されているものを用いる。 ドイツ語の知識は必須ではない。 ☆他の文化圏で書かれているドイツ語以外の作品(日本語版)を対照として読む。	インターカルチュラルリティとインターテクスチュアリティという重要な概念を理解する。異文化間の理解と誤解の成立について考察を深める。	○	◎	△	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化 I (思想)	[授業の目的]この授業では、17世紀から18世紀のフランスにおける思想と文化をめぐり、いくつかの作品を概観する。この授業における学びは、それを身に付ければ何かがすぐできるようになるという意味での実学ではない。しかし、近代社会の基本的な枠組が—よくも悪くも—西ヨーロッパにおいて形づくられた時代であり、この時代についての知識を得て、考えを深めることは、受講者自身がさまざまな文化に関して抱いている価値観を、より興行きのある、より洗練されたものにしていくのに役立つ。 [授業の概要] ※世界史以外を受験のさいに選んだ人を中心に、基礎知識を補う意味で、やや長めに「授業の概要」を以下記述する。 ・デュビュイマンとドロー『フランス文化史Ⅱ』によれば、17世紀前半のフランスは、ひとりの人間にとらえるなら「青春時代」のような状態にあった。ジャック・カルティエが「カナダ」と呼び、16世紀に探検した北アメリカの土地へは、17世紀に入ると交易やフランスからの入植が進められた。同じ頃、活版印刷が結びついて西ヨーロッパに広がった宗教改革は、伝統的なカトリック教団のフランスへも、プロテスタントの信仰を浸透させた。この浸透の結果もたらされた悲惨な宗教戦争を、ナントの勅令(1598年)により収めたのはブルボン朝の創始者アンリ4世である。これに続く17世紀前半は、若々しさを連想させる経済社会の成長を基調としながらも、成長ゆえにカトリック教会を含む従来の秩序がゆらいだ時代でもあった。同時代の哲学者ルネ・デカルトは、迷信や思い込みを因りた人間の意識のあり方を疑い、知識の確実な基礎を、数学や自然科学を支える合理精神のみに、むしろ見いだした。同じく17世紀の哲学者ヘカールの「人間は一本の茎に過ぎない、だがそれは考える葦である」という言葉は、環境に左右されやすく傷つきやすい弱さと、無限の宇宙をも分析しうる知性をもつ尊厳のあいだで、揺れ動く人間の姿をよく特徴づけている。 ・17世紀から18世紀前半にわたるルイ14世の治世は、フランス史において「偉大な世紀」と呼ばれる。政治面においてはいわゆる絶対王政、文化面においてはいわゆる古典主義をつづいて、それぞれの領域における秩序の完成が目指された。ナントの勅令の廃止(1685年)によりカトリック教団としての純化を図り、宗教的寛容で知られた当時唯一の商業大国ネーデルラント(オランダ)を屈服させようとしたルイ14世の力基盤となっていたのは、フランスの人口の多さ(約2000万人)にくわえ、国内における強力な徴兵・徴税制度といった、リシュリューやマザラン、コルベールら、王権に仕えた実務家たちが積みあげた成果のうえにできた、集権的な世俗の国家であった。また、文化面における古典主義は、こうした国家から庇護を受け、ルイ14世という君主の栄光を讃美する(現代でいうプロパガンダ)の面を確かにもっていたが、ヨーロッパの多くの宮廷が模倣するような影響力も実際に有していた。 ・イギリスとともに、いわゆる啓蒙思想の震源地である18世紀フランスの哲学者たちは、国境を越えた「文芸の共和国」のなかで活動しており、ルイ14世により確立された集権的な専制政治や、宗教における純化志向もたらしがちな狂信に対して、しばしば批判的であった。1700年代後半になると、こうした批判を含め、米州からロシアまで含む拡散されたヨーロッパ世界の中心へ上流階級において多少とも共有されて、洗練された文化・文明のあり方そのものが、自然のままであれば善良であったはずの人間を墮落させてしまったという主張さえ流行する。ジャン・ジャック・ルソーの『学問芸術論』や『人間不平等起源論』が、この種の主張の代表格である。 ・少数派の立場にたいする寛容や、「自然に任せ」といった文化的理想、また宗教的狂信と暴力の関係をどのように考えるかという主題は、17～18世紀フランスの思想が、21世紀の私たちに投げかける重い課題である。	1. 各回のテキストの講義をつづいて、17世紀から18世紀にかけてのフランスにおける思想と文化を代表する作品に関する概要をつかむ。 2. 各回のテキストに登場する人物や作品から主題を選び、いわゆるステレオタイプに陥らない形で、その思想に関する理解を深める。 3. 少数派の立場にたいする寛容や、「自然に任せ」といった文化的理想、また宗教的狂信と暴力の関係について、受講する学生それぞれがみずからの考えを練り上げる。	○	◎	△	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化 II (芸術)	近代フランスの絵画・写真・映画の歴史を概観し、芸術的・社会的な意義を学ぶ。	エポック・メイキングな芸術家や流派、作品の名前などを覚え、その歴史的意義や社会背景を説明できるようになる。あわせて、鑑賞力を養う。	△	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化 III (文学)	中世時代から現代にいたるまでのフランス語圏の文学の概説。	フランス語圏の文学の基礎知識を深める。さまざまな文学潮流の代表的な作品の抜粋を読み、分析研究をする。十九世紀から非常に盛んになった大衆文学の研究も主に探偵・ミステリー小説を通して行。	◎	○		

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	フランス語圏の文化Ⅳ(復言語・複文化社会)	【授業開始日は、4月24日(金)となります。】 世界5大陸に広がるフランス語圏(フランコフォニー)社会を「復言語・複文化社会」と捉えた上で、それぞれの社会において複数の言語文化が、どのように共存しているのか、またどのように軋解が解消されているのかを論じる。 具体的には、カリブ海諸島、カナダのケベック州、北アフリカ・マダガスカル、サハラ以南アフリカ、フランス語圏ヨーロッパなどにおける言語・社会状況を解説することで、フランス語圏社会の普遍性と差異を提示する。	(1)フランス語圏社会が復言語・複文化が共存する社会であることを具体的に知ること。 (2)言及する各社会において、言語・文化の多様性がどのように維持されているのかを知ること。 (3)言及する各社会において、「現地言語・文化」と「フランス語・文化」とが、どのような関係にあるのかを述べられるようになること。	△	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	北米文化論(ケベック講座)	本授業は、ケベック州政府の寄付講座である。 本授業は、北米大陸のフランス語圏の一つである「カナダのケベック州」をフィールドとし、オムニバス形式にて各分野の専門家や研究者が担当する授業である。言語・文化・歴史・社会・政治といった包括的な側面から、現代のケベック社会について学ぶことにより、一つの地域において複数の価値観(言語、文化、歴史、政治、経済、社会など)が共生する方法を解説することを主たる目的とする。 なお、具体的な授業内容や講演者については、初回授業において改めて通知するため、以下の「授業計画」は予定であることをご理解いただきたい。	本授業の到達目標は、以下の通りである。 ①フランス語圏の一例として、ケベック州の社会的文化的状況を概説できる。 ②多文化・多言語共生の一例として、ケベック州の社会的文化的状況を概説できる。 ③一つのフィールドを複数の観点から理解するという方法を理解できる。			○	○
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	スペイン語圏の文化Ⅰ(多言語国家スペイン)	この授業では、スペインの歴史と、そこに生きる人々が織り成す社会、そして彼らが生み出した有形・無形の文化遺産について学ぶ。とりわけ、スペインを構成する諸地域と言語・民族の多様性と、それらの歴史的重層性への理解を得ることを目的とする。また、バルセロナ大学へのSAに参加する2年生は、バルセロナとカタール・ニヤへの理解と関心を、空間的にも時間的にも広い視野の中で深めてもらいたい。	スペインの歴史・文化・社会が持つ多彩な魅力と、そこに付随する諸問題への理解と関心を深め、各自の考えをプレゼンテーションやレポートに言語化することができるようになる。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	スペイン語圏の文化Ⅱ(旧:スペイン語圏の文化Ⅱ(ラテンアメリカの社会と文化))	この授業では、南北アメリカ大陸とカリブ海におけるスペイン語圏諸国・諸地域の歴史と、政治や経済、社会や文化をめぐる諸相について学ぶ。ラテンアメリカ(イスパノアメリカ)と総称されるこれらの地域は、極めて広かつ多様性(あるいは不均衡)に満ちているが、個々の地域またはトピックへの理解と関心を深めることを通じて、可能な限りの全体像を掴むことを目的とする。	ラテンアメリカの諸相に関する基本的な理解を得て、各自の問題関心を深め、それらをプレゼンテーションやレポートに言語化することができるようになる。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	カタール・ニヤの文化Ⅰ(言語A)	カタール・ニヤの文化IIはカタール・ニヤ語についての授業です。 カタール・ニヤ語で自己紹介や周りの人を紹介できるようになります。	簡単なカタール・ニヤ語会話ができるようになります。 そして、ローマ帝国の言語であったラテン語から(スペイン語やフランス語同様)どのようにしてカタール・ニヤ語ができていったか、カタール・ニヤ語がどのように使われているか、カタール・ニヤの人々はこのようにスペイン語とカタール・ニヤ語を使い分けて暮らしているのか、スペイン語とカタール・ニヤ語はどこが似ていて、どこが違うのかなども勉強します。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	カタール・ニヤの文化Ⅱ(言語B)	カタール・ニヤの文化IIIはカタール・ニヤ語についての授業です。 カタール・ニヤ語で日常生活や自分の過去の話ができるようになります。カタール・ニヤ語の文法だけをやる、ということではありません。	簡単な日常生活などのカタール・ニヤ語会話ができるようになります。 また、ローマ帝国の言語であったラテン語から(スペイン語やフランス語同様)どのようにしてカタール・ニヤ語ができていったか、カタール・ニヤ語がどのように使われているか、カタール・ニヤの人々はこのようにスペイン語とカタール・ニヤ語を使い分けて暮らしているのか、スペイン語とカタール・ニヤ語はどこが似ていて、どこが違うのかなども勉強します。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	カタール・ニヤの文化Ⅲ(歴史・社会A)	カタール・ニヤという何を思い浮かべますか? ガウディ? バルサ? それもちろんカタール・ニヤ文化の一部ですが、それだけではありません。皆さんがスペイン文化だと思っているものの中にも、実はカタール・ニヤ文化だ、というものが少なくありません。ドリミロもカタール・ニヤ人、ピカソも重要な時期をバルセロナで過ごしました。音楽では、ホセ(ジェズップ)・カラスやマンセラ・カバリエ。スポーツで言えば、北京オリンピックの代表選手の80%がカタール・ニヤ人。テニスのナダルだってカタール・ニヤ語圏の出身です。このほか海と山に囲まれたカタール・ニヤには豊かな歴史と文化があります。食文化、ワインの文化、民族舞踊、民謡...カタール・ニヤ文化の魅力を知り始めるきっかけがたいです。この授業では、カタール・ニヤの地理や歴史と関連させて文化について勉強して行きたいと思えます。バルサやガウディを見る目が変わりますよ。きっと。	カタール・ニヤ文化IIIでは、知っていなければいけない、基本的なカタール・ニヤの文化を学びます。カタール・ニヤ文化IVでは、ニュースを読みながら現代のカタール・ニヤについて学びます。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	ヨーロッパの文化	カタール・ニヤの文化Ⅳ(歴史・社会B)	カタール・ニヤという地名は日本ではあまり知られていなかったにもかかわらず、独立問題で最近日本のニュースでも報じられています。ニュース報じられている現代カタール・ニヤの背景にある豊かな歴史と文化を発見しましょう。	カタール・ニヤ文化IVでは、ニュースを読みながら現代のカタール・ニヤ、そしてその背景にある歴史や文化について学びます。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化Ⅰ(文化史)	近世イギリス演劇の事情について、基本的な情報を学んだ後、英語で書かれた論文を読むことで、各時代状況の中で、英米のみならず日本などの異文化圏においても、それらの演劇作品がどのように変化して大衆に受け入れられてきたか、そしてその今日性について、他者とのディスカッションもおこなうことにより、学生一人一人が確認していく。	異文化間における交流、つまり異文化間コミュニケーションを図るためには、異なる文化的背景を持った者同士が、お互いの文化を理解し合うことが必須である。そして、異なる文化的背景を持つ他者の文化的生産物(cultural products)を受容、理解するためには、その異文化間に横たわる文化的境界を越境するもの、つまり架け橋のような要素の存在が重要である。 本授業では、時代を超えて英語圏を代表する作家であるWilliam Shakespeareの演劇を中心とした近世イギリス演劇を、「異文化圏間」、「異時代間」を縦横に巡る「越境性」、「今日性」をキーワードに、変化する時代、そして異文化論、特に日本の文化と関連させて把握できるようにすること、そして演劇のみならず、時代の変革期における大衆文化と社会を関連づけて考えられるようになることを目指す。 さらには、英文で書かれた関連する論考を自分で読み解くこと、また特定のShakespeare作品の「越境性」「今日性」について受講生同士、そして外国人等の異なる文化的背景を持った人とのディスカッションを通して、自身による異文化の「越境」を体験することも目指す。	△	◎		

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化II(思想史)(History of Western Thought)	The Culture, Language, and Thought of the English-Speaking World is the product of many historical interactions between a variety of peoples with different ways of thinking and living in the world. To understand many aspects of the societies in the modern English-Speaking World, one must first recognize the historical forces that shaped them and brought them about.	The primary goal of this course is to give students the basic knowledge necessary to understand: 1) how societies and cultures change in general and 2) how the cultures of the English-Speaking World developed their unique forms. Using the framework of cultural change, we will examine the formation of "Western" religious and political institutions that developed before 1500 CE in order to better appreciate the roots of "Western" social, political, and economic thought. Building on this foundation, the evolution of modern social systems and political-economic thought that occurred in the English-Speaking World after 1500 CE will be discussed.	◎	△	△	
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化III(現代事情)	英語圏世界とは、むしろイギリスや北米だけではなく、世界中に広がるイギリスの統治地域や植民地(そしてアメリカの領土なども)を多く含む。したがって、英語圏世界について学ぶことは、多くの場合、旧植民地地域について学ぶことでもある。そのためにもこの授業では、かつて「第三世界」と呼ばれた旧植民地地域の歴史的な軌跡を概観して、「世界史」を異なる視点から学び、ひいては「英語圏」という枠組を再考することを目的とする。	・旧植民地地域について学び、現代の国際状況の理解につなげる。 ・旧植民地地域の歴史を振り返り、その主体性を重んじながら、西洋の視点から語られる「世界史」に対する別様の視点を身につける。またそこから、多様な文化的背景をもつ人々および国々の相互交渉とその意義や課題について複数の角度から理解する。 ・東西の対立という観点から説明され、理解されがちな冷戦を、旧植民地地域の経験から再考する。	△	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化IV(文学と社会A)	アメリカ文学をアメリカの社会や文化のさまざまな諸相と関連づけて考察する。各時代の文学作品に明示的に示されている問題意識を考察するだけでなく、なげない描写に隠されたアメリカの社会や時代の特異性を検討する。また、文学作品が、時には時代を超えながら、アメリカの映画、映画、音楽など、ほかの文化領域にどのような影響を及ぼしているかを考えることで、アメリカ文学だけでなくアメリカ文化の奥深さを味わってもらいたい。	受講生は、アメリカ文学についての基礎的な知識を身につける。また、代表的な作品の内容を知るとともに、そこで描かれているアメリカの社会、文化、宗教、エスニシティ等の諸相を歴史的な視点から考察するための素地を身につける。	△	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化V(文学と社会B)	18世紀から20世紀にかけての英語圏(イギリスとアイルランド)の文学作品を取り上げ、各作品の社会的・文化的・歴史的背景を考察しながら、文学を理解するうえでの知的視野を広げることがめざします。	それぞれの文学作品にうかがえる文体・人物造型・風景描写などを仔細に検討することで、時代の思想を読み解き、近代・現代における文学と社会のつながりについて理解を深めます。	◎	◎	○	△
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化VI(文学と社会C)	19世紀から20世紀の変わり目に特有の「不安」——ダーウィニズムが生み出した先祖返りの不安、退化幻想、そして植民地から本国、野蛮から文明への逆侵略の恐怖——にとりつかれた、世紀末のイギリス小説を読むことを通じ、イギリス文学・文化・歴史への理解を深める。	イギリス小説の代表的な作品を読み、テキスト(構造と細部)とその背景(文化・歴史)を理解する。 作品と作者の文学史における位置づけを理解する。 イギリス小説を原語でも読めるようになる。	△	◎		
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化VII(英語の構造)	本授業は、学生が現代英語の構造について、様々な面から考察するを目標とするものです。良きにつけ悪しきにつけ国際語になっている英語は、どのような言語であるのか、学生は、担当者とともに、授業を通じて考察していきます。	1. 学生が英語の音声面、文法面等の構造について、知識を得られること。 2. 学生が英語の構造についての研究の仕方について、ある程度の知識を得られること。 3. 学生が英語という言語に関しての様々な問に対して、答えるべき道筋をつけられること。 4. 併せて、学生が英語・英語文化圏についての知識を深めること。 なお、上記の1,2で述べた知識ですが、キマとなる点は以下の通りです。 a) 音声器官、発音記号。 b) 音素の考え方(構造主義)。 c) 言語の知識を構成する各部門の考え方。 d) 記述上のさまざまな単位。 e) 統語範疇(品詞論)。 f) 直接構成要素分析、句構造。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	英語圏の文化VIII(英語の歴史)	英語の歴史は、ゲルマンの民族がブリテン島に侵入してから始まります。本授業では、担当者とともに、学生は、本来は大陸のゲルマンの部族の言語であった言語がブリテン島に入り英語になってから、どのような変化を遂げて、21世紀の今のような国際的な言語となっていたか学んでいきます。	1. 学生が英語の歴史について、ひと通りの知識を得ること。 2. 学生が英語の歴史に興味を持ち、現代英語の様々な事象について、歴史的な説明を読み解くこと。 3. 学生が言語の歴史研究について、その大まかな方法論を知ること。 4. 学生が英語の運用力をつけること。	◎	◎	○	
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	Structure of English	The aim of this course is to consider structural aspects of the English language, which has become the de facto 'global' language. Towards the end of this course, students will be able to attain the following goals indicated below.	1. To get a general idea about how English sounds and grammatical phenomena are described. 2. To obtain a certain level of knowledge about how various structural aspects of modern English SHOULD be described. 3. To obtain enough knowledge about modern English so as to answer various questions about the alleged 'mysteries' of the English language. 4. To study English in its general sense. (You see, you all finished your SA programmes, so you should keep that level of English until graduation.) The following is the list of important topics (among others) to be covered in this course: a) articulatory organs and phonetic symbols, b) the notion of phoneme (introduction to structural linguistics), c) modular approach to linguistics, d) various units in linguistic description, e) syntactic categories (parts of speech), f) intermediate constituency, phrase structural analysis	◎	◎	○	

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	言語文化コース科目群	英語圏の文化	History of English	Towards the end of this course, students will be able: 1. to study the history of the English language, which, good or bad, has become an 'international language' in our modern world; and 2. to develop a general interest in the language itself through doing a lot of reading.	1. To get a general idea how the English language has evolved. 2. To try to explain various apparent 'mysteries' of English in historical terms, 3. To begin to develop a general theory of linguistic change, 4. To study English in its general sense. (You see, you must keep that level of English acquired through your SA experience!)	◎	◎	○	
専攻科目	国際社会コース科目群	国際社会研究の方法	世界とつながる地域の歴史と文化	この授業は、2012年度から夏休みに長野県南部の飯田・下伊那地域で実施している「SJ国内研修」(SJ=Study Japan)に参加する留学生・ボランティア補助員および希望する一般学生を主対象に、その事前学習用として開講されるものである。「SJ国内研修」とは、一般学生のSAに相当するもので、地方の中山間地域での諸活動を体験することで、留学生にとつてのSAとも言えるの日本を、東京からの発想とは別に、地方の視点でも考える目を養うことを趣旨としている。したがって、この授業の目標も、飯田・下伊那地域の歴史・社会・文化・民俗・自然などについて、一通りの前提知識を身につけることで、8日程度の「SJ国内研修」を有意義に送れるようにすることにある。国際文化学部の研修であることに鑑み、とりわけこの地域における国際化や異民族との関係、および文化に重点を置きながらみていく。	授業の進展につれ、南信州の中山間地域の飯田・下伊那にも、東京とはまた異なる歴史・文化・自然があり、固有の国際関係があることが理解できるであろう。最終的には、「SJ国内研修」に際して探求すべき自分なりのテーマをみつけ、夏休み中の自己学習を経て、研修本番につなげられるようにすることが目標である。「SJ国内研修」に参加せず、単なる一授業として受講することも可能だが、そうした受講者にとっては、飯田・下伊那を例に、日本のなかに存在する多様性や多文化を考える視点を得ることが到達目標となる。そこで得られた視点やアプローチは、日本の他地域を考える際にも有効に機能するであろう。	△	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際社会研究の方法	実践社会調査法	質的社会調査の実践と量的社会調査のリテラシーを学ぶことで、卒業研究などで活かせるような研究方法を身に付けることを目指す。なお、量的社会調査については原則を学ぶに留め実践は行わない。	(1)統計的な社会調査データの読み取りができる。 (2)質的調査(観察、ドキュメント分析、ライフストーリー分析など)を実践できる。 (3)研究発表の方法を理解・実践できる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際協力	実践国際協力	大学教育で「実践」から学ぶことには2つの意義があると考える。1つは体系立った学習の応用として、もう1つは新たに学習すべき領域を見つけるためである。この授業では後者を主たる目的とする。テーマは「国際開発協力」を中心に取上げる。国際開発協力の実践例を通して、国際社会の理解につながる思いもよらぬ学問分野の大切さを見出し、更なる学習と探究の端緒となるようにする。	(1)国際開発協力の理解に必要な概念や用語を理解し説明できるようになる。 (2)国際開発協力の実践課題を抽象化し他に応用できるようになる。 (3)実践的な学習におけるグループ討議の意義を理解する。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際協力	国際関係研究 I (アクターに着目した理論の捉え方)	本授業ではアクター(行為の主体)に着目して「国際関係」を学ぶ。「国際関係」を国家の関係のみで語ることは困難であり、特にNGOや企業などの民間アクターの存在は重要である。本授業ではそのために必要な理論を習得するとともに、それを通して国際社会の諸問題を多角的に分析する力を養う。	(1)非国家アクターを含む様々なアクターが「国際関係」にどのような影響を及ぼしているかを説明できる。 (2)「国際関係」に関わる事件や問題が生じたとき、理論的に現象を説明することができる。 (3)関連する文献の趣旨を正しく読み取ることができる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際協力	途上国経済論	日本の経済は、様々な資源の供給元や市場として世界各国との相互依存を強めている。この講義は、世界人口の半数以上が暮らす、開発途上国と呼ばれる国や地域の経済と社会について、固有の歴史/文化的背景も含め日本とのかかわりを念頭におきながら基礎的な知識の習得をめざす。	本講義においては、ア)途上国経済の分析枠組み、特徴、イ)主要地域や主要国の経済・社会の特徴について学び、ウ)日本社会や経済の世界における位置づけをよりよく理解し、エ)将来社会に出た際に諸外国の人々と基礎的な知識に基づいた意味あるコミュニケーションができるようになることを目標とする。		◎	◎	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	国際関係研究IV(他者イメージ論)(旧:他者イメージ論)	他者との遭遇、他者の表象をテーマとした講義なので、われわれの自己認識の歴史的形成過程を学ぶことができる。	われわれの自己認識のためには必ず他者の存在が不可欠である。そうした他者の存在をどのように理論化するかの問題で、エドワード・サイードの「オリエンタリズム」論を基礎におきながら、博物館、博覧会という装置の文化的意味を検討する授業である。最後の5回はその応用問題として、より高認識の背景を分析する内容である。		○	◎	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	宗教社会学 I (仏教思想)	上座仏教は、東南アジアの大陸部諸国(タイ・ミャンマー・ラオス・カンボジア・ベトナムの一部)を中心に、スリランカ、中国雲南省の西双版纳州や徳安州でも信仰されている。上座仏教後社会においては、男子の大部分が一時的出家を体験し、持鉢する出家者に対して在家者が食物を寄進する姿も毎朝のように見られる。仏教が世俗の人々の生活に根ざして生きられているのである。こうした人々によって生きられる仏教思想のあり方について、本講義では写真や映像資料を用いながら具体的に説明する。それによって、上座仏教の経典に書かれた思想とその現実を、地域社会とのかかわりから理解することを目的とする。さらに、日本人と上座仏教の歴史的な交流と断絶に焦点を当てることにより、国境を越える仏教思想の変容過程を考察する。	上座仏教の教理と地域に生きる仏教徒の思想について、具体的な事例をもとに論じることができる。また上座仏教後社会との比較から、日本人の「仏教思想」に対する認識を自ら深めることができる。		◎	○	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	宗教社会学 II (キリスト教と社会運動)	キリスト教は様々な社会思想と結びつきながら、近代社会における諸問題に対する改革運動を、世界各地で展開してきました。この授業を通じて、学生は19世紀以降におけるキリスト教を基盤とする社会運動が、どのように近代社会における諸問題(労働問題・人種差別・貧困・ジェンダー問題・植民地主義など)を捉えたのか、また新たな社会思想(進化論、社会主義、フェミニズム、など)とのように関わりをもっていったのかを、社会思想史・社会運動史の立場から分析し議論していきます。	1. 近代のキリスト教に基づく社会運動を考える上で、重要な基本概念や理論について理解できるようにする。 2. 宗教と社会運動の関係や、社会思想や歴史意識の視点から分析できるようにする。 3. キリスト教に基づく社会運動に関する簡単な史料分析を行えるようになる。		◎	○	

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	宗教社会論Ⅲ(イスラーム思想)	このころアラブおよびイスラームへの関心が急速に高まってきている。だが、一言でアラブといっても、その内容はそう簡単ではない。ましてやイスラームとなると、さらに複雑である。第一に、アラブは三千年にわたる古い歴史を持ち、古典アラビア文化の華を咲かせた時期があり、それらは西欧文明の一部をさなしている。第二に、今日のアラビア世界は純粋なアラビア民族ばかりでなく、政治的にアラブと呼ばれるにすぎない民族をも包含している。アラブあるいはアラビアという呼称は時代的にも地域的にも、かなり広い範囲にわたって使われるようになってきている。イスラームはアラブのもとで生まれたが、アラビアの領域外に拡大し、今日ではきわめて多数の非アラビア民族のもとで活力を保っている。本講では、イスラームを、宗教面と世界史の流れから概観したい。	アラブ・アラビアないしイスラームについて基本的な知識を得ること。		○	○	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	間文化性研究概論	翻訳が自然言語間の転換作業であるにとどまらず、人間の意志表出のすべてを可能とする基本であることを学ぶ。事例分析としては、文学作品の自然言語間における翻訳テキストを取り上げ、翻訳の基本概念を把握する。サン・テグジュペール『星の王子さま』を使用する。できる限り多くの言語の翻訳を参照する。星の王子さまは、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、ロシア語、中国語、朝鮮語、そのどれにおいても、私たちが子どもの時に読んだのと全く同じイメージなのでしょか。小生意気な小さい大人なのか、めぞめした幼女なのか、元氣一杯のわんぱうなのか、テキストに忠実に分析。日本語訳が新しく数冊出版されました。その比較検討も行ないます。	翻訳についての基本的学術用語を理解する。翻訳の原理と可能性・限界を知る。私たちが日常的に行っている他言語テキストの翻訳について、学術的概念をあてはめて理解する。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	多文化社会と人間	世界的に人の移動が活発になり、移民・難民の数は増え続けている。一方、アメリカ・メキシコ国境間への壁の建設計画、ヨーロッパでの極右政党の台頭に象徴されるように、受け入れ社会における移民・難民への憎悪も増している。日本における在留外国人数は過去最高を更新し続けている。2019年4月から日本政府は「特定技能」人材の受け入れを開始した。5年間で34.5万人から受け入れるという。しかし、彼・彼女らが家族を帯同することは原則として認められていない。さらに、移民政策は取れないと強調している。コロナウイルスの影響を受け、一時的に在留外国人数は減少するかもしれない。しかし、中長期で少子高齢化を捉えるならば、外国人(移民)を受け入れる議論は避けては通れない。また、課題解決の方策が必要とされる。本授業では、日本における移民・難民の受け入れの状況を踏まえ、多文化社会のあり方を考える。	・日本の移民・難民の受け入れ状況を理解する。 ・多文化社会をめぐる基本的な概念を国際社会学に基づき理解し、日本社会の状況に照らして考えられるようになる。 ・将来、企業、NGO/NPO、国際機関等で働く際に必要となるクリエイティブシンキング・想像力を身につける。		◎	◎	
専攻科目	国際社会コース科目群	多文化社会	国際関係研究Ⅶ(サブタイトル:家族と結婚の人類学)	人間は、誕生から死ぬまでの間、つねに他者との関係を持ち続ける。あるいは、誕生前の生殖過程および死後の世界においても、人間は人びとと結ぶ関係の網の目に生きていくといっても過言ではない。本授業では、とくに家族と結婚をキーワードとして、このような人と人をつなぎ合わせる社会関係およびそれを支える制度や組織について考察する。	・文化人類学、とくに家族と結婚に関する基本的な理論や概念を習得する。 ・ものを幅広い視野から捉えることによって得られる他者理解の洞察力に身に付ける。 ・世界の多様な人間の在り方を学び、結婚・親子・家族とは何かについて相対的な視点を獲得する。		◎	○	
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	国際関係研究Ⅱ(メコン流域国の開発と環境(社会と自然))	本授業では東南アジア半島部のメコン河流域という「地域」に着目して「国際関係を学ぶ」「開発」をテーマにし、特にその社会的・環境的側面を多角的に見る視点を養う。	(1)「地域研究」の視点からメコン河流域の自然環境やそれに依拠する社会について学び、日本とは異なる生活様式や社会への理解を深める。 (2)メコン河流域の環境・社会問題と日本との関係について学ぶ。 (3)以上の2点を通し「国際関係」を学ぶ上で「地域」の理解のための多角的な視点を身につける。	◎	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅰ(華僑・華人社会)(旧:移民研究Ⅰ)	「人の移動」という観点から19、20世紀のアジアの歴史を見ると、中国系移民の動きを筆頭に挙げることができる。中国大勢から移住し、現地に定着した華僑(中国国籍保有者)、華人(現地国籍保有者)を合わせると2千万人から3千万人といわれる。これら中国系移民が現地社会に与えた影響は計り知れないものがある。この授業では、華僑の移住と定着、ネットワークとアソシエーション、生活・文化などについて基本的知識を得るとともに、「内なる異文化」である日本華僑の歴史と社会の特徴、人々の日常生活、日本社会との関係などを理解し、等身大の日本華僑像を持てるようになる。	中国系移民に関する基本的な知識を得るとともに、日本における多文化共生について考える力を養う。		◎	○	
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅱ(朝鮮民族のディアスポラ)	朝鮮民族の国外・域外への移動および移動先での処遇・生活あるいは再移動について、日本への渡航者・在住者を対象として考察します。日本に在住する韓国・朝鮮出身者(以下、在日韓国・朝鮮人)をめぐる現状・課題を考察する際には歴史的背景に関する理解が必要になるという前提のもと、日本の「戦前」「戦後」の時期にわたる在日韓国・朝鮮人の歴史を学ぶという形になります。	・在日韓国・朝鮮人の歴史に関する基礎的な知識を習得すること。 ・在日韓国・朝鮮人の現状・課題に関わる情報などに接した時、歴史的経緯をふまえたうえで考えられるようになること。	△	◎	○	△
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	人の移動と国際関係Ⅲ(アジア・太平洋)(旧:移民研究Ⅲ)	近年、人の国際的な移動により異文化間の深刻な摩擦が生じるケースが増加している。本講義では、アメリカの移民政策の歴史や現状を日本や西欧諸国のそれと比較することで、異文化を理解すると同時に自国の文化を客観的に眺めるための通文化的かつ複眼的な視点を身につける。現実の摩擦が生じた場合にも、偏りのない分析と健全な批判精神を保てる能力を養うことを目的とする。	1)「移民の国」であるアメリカの移民政策と市民権制度の歴史を概観し、2)それらが現代のアメリカ社会でどのような意味をもつのかを検討し、3)西欧諸国の政策・現状と比較し、4)少子高齢化の中、入管法の改正により「移民」導入に舵をきった日本の政策の現状と今後の課題を検討する。		◎	◎	
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	国際関係研究Ⅲ(地域紛争とエスニシティ)(旧:地域紛争とエスニシティ)	「インドネシアのポストコロナリズム」というテーマで講義を行う。オランダ植民地時代にまでさかのぼる領土と暴力の問題を詳細な現地研究を元にした資料から考える。現代国民国家が普遍的に抱える「国家と暴力」の問題を、植民地時代にまでさかのぼり検討することで、その本質を理解する。	1966年登場したスハルト政権は「開発独裁」体制と呼ばれるが、その本質を理解するにはオランダ植民地時代だけではなく、日本軍政時代の影響を考慮する必要がある。オランダ植民地体制の確立に伴う「民族」概念、抵抗、独立革命時代の国民意識の形成、そしてスハルト時代における開発と紛争の問題を理解し、現代国民国家に特有な「暴力」の起源の問題に迫る。		○	◎	

分類			科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	国際関係研究V(東南アジアの世界遺産をめぐる文化の政治学) (旧:東南アジアの文化) ※言語文化コースより移動	「東南アジアの世界遺産をめぐる文化の政治学」というテーマで授業を行う。地域としての東南アジアを理解し、その上で、インドネシア(ボボドワール、バリ、スマトラの熱帯雨林)、フィリピン(イガオの棚田)それにタイ、カンボジア国境紛争の原因となっているアレア・ビヘア寺院などの世界遺産をめぐる文化の政治学的な問題を検討する。	国際文化学部生としてはなじみのない東南アジアについて、その世界遺産をめぐる文化の政治学的な課題を理解し、日本との共通性と世界的なコンテキストを把握できるように努める。	△	○	○	◎
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	持続可能な社会	様々な分野で持続可能な社会をどの様に作っていったら良いのか、考えられている。ここでは生物多様性にもついて、持続可能な社会作りについて考えたい。例えば生物の分布は環境とは無関係だ。人間以外の生物側の論理は、人間社会とは関係がない。しかし、人間社会では自分たちの利潤を理由付けながら生物多様性を取り扱う。それは人間社会で、生物多様性に価値を与えるときに説明がしやすいくらいだ。むしろ、生物多様性とは、人間が多様な価値観をみとめるという人間側の論理なのかもしれない。また、いっしょに不快動物をとりあげて生物多様性についても考えて見る。	人間が本来その一部であるはずの生物についても理解し、生物多様性について説明が出来る。その上で国家を超えた国際社会を捉え直すことが出来る。	○	◎	○	◎
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	地域協力・統合	「ヨーロッパとは何か」という問いに、自分なりの答えを言えるようになるのがこの授業の目的です。この授業を適切に位置づけるために、法政大学Webシラバスの検索結果(2020年度)を参考にしながら、ヨーロッパの問題を扱う際に、どのような切り口があるかを以下簡単に紹介させていただきます。まず、法学部なら、第二次世界大戦後の統合をめぐる政治過程に焦点をあてるやり方があります。「ヨーロッパ統合論」「EUの政治と社会」。経済学や経営学を学ぶ立場からは、同じく第二次世界大戦後のヨーロッパ経済史に焦点をあてるやり方があります。「ヨーロッパ経済論」「EU経済とドイツ」。農業経済学の観点からEUの共通農業政策(CAP)を扱う授業も開設されています(「農業経済論A」)。グローバル教養学部(GIS)には、連合王国の外交関係の観点から、英語を使用言語として、対EU関係を論じている授業もあります(「UK: Society and People」)。これらの授業と比較した時の、本授業「地域協力・統合」の特色は、上述のような実学的な切り口はとらず、高校までの世界史の知識を確かながら、これからの国際社会で活躍する人材が身に付けておくべき基礎教養として、思想史や文化史に焦点をあてつつ、「ヨーロッパとは何か」について認識を深めることにあると言えます。	①「ヨーロッパ」の地理的広がりについて、みずからの考えを述べる事ができる。 ②古代ギリシア、ヘレニズム、古代ローマの文化的・政治的・哲学的遺産と「ヨーロッパ」を関連付けて(専門家としてではなく)学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ③西ローマ帝国崩壊前後以降、10世紀にいたるゲルマン人、ノルマン人、スラブ人の民族大移動と「ヨーロッパ」の形成を、各国史との関係で(専門家としてではなく)学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ④カトリシズムを軸として形成される中世の西ヨーロッパと、正教を軸として形成される東ヨーロッパや、イスラームの拡大を関係づけつつ(専門家としてではなく)学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ⑤ルネサンス期を特徴づけるヒューマンズムの人間論上の意義、大航海時代における非ヨーロッパ地域への影響、宗教改革後の諸教派がもたらした信仰と政治の関係性について、(専門家としてではなく)学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。 ⑥ヨーロッパ各国における絶対主義および啓蒙専制主義のもとでの商業の発展を通じて発生した「ヨーロッパ中心主義」的な意識に関し、肯定・否定の両面から論じることができる。 ⑦イギリス、アメリカ、フランスや他のヨーロッパ諸国にみられる人権や民主主義にもとづく思想・制度の発達について、(専門家としてではなく)学部学生にふさわしいレベルで論じることができる。	○	◎	◎	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	Approaches to Transnational History	This course is designed for students who are interested in the history of cultural exchanges from transnational perspectives. By exploring various kinds of cross cultural encounters facilitated by the movement of people, ideas, goods, services, capital, and technology, students will be introduced to the basic concepts and methods of transnational history.	By the end of this course, students will be able to ● Understand various approaches to transnational history and how these approaches are connected to the issues of colonialism, the development of capitalism, and the formation and spread of the nation-state. ● Critically read and analyze both secondary scholarship and primary historical documents on transnational history. ● Write a short critical essay analyzing cross-cultural encounters and movements across borders.	○	○	○	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	Cultural Dimension of American Foreign Relations	このクラスで学生は、アメリカ外交の文化的側面を学びます。グローバルな視点からアメリカの外交政策を理解するために論文を読み理解を深めます。	The goal of this course is that students to understand American foreign relations. In particular, students will gain academic knowledge on American foreign relations through issues of immigration.	○	○	○	○
専攻科目	国際社会コース科目群	国際関係と地域	国際関係研究VI (サブタイトル:アフリカから見る世界)	サハラ以南アフリカについて、主に歴史、社会、政治、国際関係というカテゴリーから学び、アフリカ研究の導入となる知識を身につける。それによって、変わりゆくアフリカ地域の「いま」を考え、アフリカを多面的に理解することを目指す。	・アフリカを学ぶための基礎知識を身につける。 ・アフリカの多様性を理解し、アフリカ研究への関心を高める。 ・世界史のなかのアフリカ地域をとり直す。国際関係におけるアフリカの位置について考える。 ・アフリカについて学び、アフリカから「世界」を見ることで、欧米中心の視点や思考を乗り越える。	○	◎	◎	
専攻科目	演習		情報文化演習 表象文化演習 言語文化演習 国際社会演習	演習とは、それまでの学習である程度の知識を身に付けた学生が、少人数指導の環境の下、みずからの専門性をさらに深める場である。	(1) 語学力やICTのリテラシーを用い、演習での活動に関係する先行研究を検索し、文献リストを作成することができる。 (2) 文章の執筆や作品の制作にあたり、剽窃の禁止や著作権の尊重など基本的な学術ルールがあることを理解し、実践することができる。 (3) 受験勉強や資格試験のための勉強と、先行研究を踏まえた自立的な研究の違いについて、みずからの考えを述べる事ができる。	◎	◎	◎	◎
専攻科目	インターンシップ		インターンシップ事前学習	本授業の目的は、学生が「国際文化学部に関連性のある企業・団体の第一人者によるプロフェッショナルな仕事」を理解し、今後の就職活動などに活かすことにあります。複数の外部講師ら登壇する「オムニバス授業」です。 本学部学生の中には、卒業後どのような仕事に就くのか、就けるのかという点について不安に思っている学生もいるかもしれませんが、本授業を通じて、学生は幾つかの業界は国際文化学部との親和性が高いものであることを理解するでしょう。本授業では、そうした業界の第一線で働く経験豊富な講師による授業を見聞きすることで、学生はそれぞれの業界・企業・団体の仕事の内容と将来の展望を知ることができます。	1) 国際文化学部に関連する企業・団体の第一線で活躍する外部講師らによる講義を通じて、学生は各職種の特徴・問題などを学ぶことができる。 2) 実社会で生きるとはどういうことを、最新のデータや体験談を交えて学ぶことができる。 3) 国際文化学部と親和性の高い企業・機関に関する生の情報を収集することで、「インターンシップ」という就業体験や就職活動などの準備にも活かすことができる。		○	○	○

分類		科目名	授業の概要と目的(何を学ぶか)	到達目標	DP 1	DP 2	DP 3	DP 4
専攻科目	卒業研究	卒業研究	卒業研究とは、学部での学びの集大成であり、学術的に意味のあるテーマをみずから設定し、自律的な研究を展開しうるとを証明するための場である。	(1)論文の執筆や作品の制作に際して扱う主題について、先行研究を読み込み、文章に要約することができる。 (2)学術的に意味のある研究テーマとは何かという問題について、みずからの考えを述べるができる。 (3)みずから設定した研究テーマが、既に身に付けた語学力やICTのリテラシーで達成可能かという問題について分析する力を持っている。	◎	◎	◎	◎
専攻科目	FS	海外フィールドスクール	2021年度の海外フィールドスクール・表象文化コースはオンライン夏季講座として実施されます。海外フィールドスクール表象文化コースでは、生活や文化背景の違う人々との共同作業を通じて、多角的な見方、考え方による双方向の文化理解やコミュニケーションについて体験的に学びます。担当教員は稲垣立男です。 今年度フィリピンを渡航先として計画されていた表象文化コースのプログラムは、以下の通りです。 「フィリピンの首都マニラとネグロス島西部の中心都市バコロドに滞在する。まず、マニラでは主要な博物館や大学美術館、アートギャラリー、オルタナティブスペースを訪ね、フィリピンの文化や現代アートについて体験的に学ぶ。次にバコロドでは、ラ・サル大学映像学科の学生や地元のアーティスト、地域コミュニティとのコラボレーションによる映像作品の制作を試みる。帰国後に海外フィールドスクール報告展を開催し、滞在中に制作した作品および研究記録(レポート)を発表する。」 オンライン講座では、昨年度のプログラムをベースに、国内で実施できる講義や実習によるプログラム内容となります。	研究者やアーティストによる講義やフィールドワークを通じて東南アジアの文化や人々の暮らし、現代アート、映像やパフォーマンスなどの芸術表現や文化政策への理解を深めることを目的とします。	○	◎	◎	◎